

はしがき

東京法務局と東京都人権擁護委員連合会は、次代を担う多くの中学生に人権問題に関する作文を書くことを通じ、互いの人権を尊重することの大切さについて理解を深め、豊かな人権感覚を身に付けてもらうことを目的として、昭和四七年度から、都内の中学生を対象とした人権作文コンテストを実施してまいりました。また、昭和五六年度からは、法務省及び全国人権擁護委員連合会が主催する「全国中学生人権作文コンテスト」が実施されることとなり、毎年、数多くの作品が寄せられています。

本年度においても、東京新聞と共催し、東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、TBSラジオ、公益財団法人人権擁護協力会の後援をいただいて東京都大会を実施しましたところ、都内三十一校の中学校と外国人学校から、四万二九〇一編に上る作品が寄せられました。

本作文集では、入賞作品の中から掲載の同意をいただいた三十五編を紹介させていただきました。いずれも中学生らしい純粋な感覚で人権課題をとらえた作品です。より多くの方々にお読みいただき、人権尊重思想の普及高揚が図られることを願っております。

終わりに、本年度の東京都大会実施に当たり、熱意をもって応募された中学生の皆さんを始め、多大な御理解と御協力を賜りました各中学校、外国人学校、東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、TBSラジオ、公益財団法人人権擁護協力会、東京都教育庁、各市区町村教育委員会、各市区町村人権擁護事務担当者の皆様方、共催いただいた東京新聞に、厚く御礼申し上げます。

平成二九年十一月

東京法務局 東京都人権擁護委員連合会

目 次

【入賞作文】

最優秀賞(東京法務局長賞)

心のボルトになって。 武蔵村山市立第五中学校 二年 途田空良

最優秀賞(東京都人権擁護委員連合会長賞)

地域で守る子供の人権 新宿区立新宿西戸山中学校 一年 池田麻里子

最優秀賞(東京新聞賞)

探せなかった四つ葉のクローバー 星美学園中学校(北区) 二年 剣持夢有

優秀賞

支え合う社会 東京女学館中学校(渋谷区) 三年 井本奈々

見えない心の壁 練馬区立開進第二中学校 三年 長島りな

第一歩 練馬区立関中学校 三年 雨宮二葉

「障がいとの戦い」 神津島村立神津中学校 二年 松江丞の進

生きているって何だろう 府中市立府中第二中学校 三年 岸空夏

相手の立場に立って 府中市立府中第十中学校 三年 鈴木大斗

地域のつながりと「子ども食堂」 小金井市立小金井第一中学校 三年 後藤むつみ

祖母との記憶 羽村市立羽村第三中学校 三年 中川愛佳

奨励賞

カッコイイお姉ちゃん 中央区立佃中学校 三年 姥汐里

この人の、ここが好き 荒川区立第七中学校 三年 肥後羽蘭

「話す」ということ 渋谷区立広尾中学校 二年 廣瀬理音

人 足立区立千寿桜堤中学校 二年 岡野愛理沙

病気を通して学んだこと	江戸川区立葛西中学校	二年	森井百合香
祖父	大島町立第一中学校	三年	高橋風花
いじめ	立川市立立川第六中学校	三年	張馨藝
障害者にも平等な人権を	啓明学園中学校（昭島市）	三年	原田桃奈
アイヌの知られていない差別	八王子市立横山中学校	一年	茂木咲彌
まず自分から一歩、踏み出して	八王子市立七国中学校	三年	申娜敬
超高齢化社会と私	稲城市立稲城第二中学校	三年	高尾奏音
障害者の匿名報道は人権侵害か	稲城市立稲城第四中学校	二年	千井野睦
これからの日本	稲城市立稲城第六中学校	二年	高山知奈
諦めないで	多摩市立多摩中学校	三年	河上桜
私の願い	府中市立府中第二中学校	三年	山口愛未
恩返しの焼豚	府中市立府中第八中学校	一年	内田柊
乗り越えた先にあるもの	国分寺市立第二中学校	三年	石田裳也加
過去～未来を変える日本の勇者～	国分寺市立第四中学校	二年	本庄愛歩
先生が教えてくれたこと。	国立市立国立第二中学校	二年	三次あかり
普通の社会への第一歩。	明治大学付属明治中学校（調布市）	三年	古川裕菜
青い空に平和への祈りを込めて	東村山市立東村山第一中学校	二年	清水花音
温かい福祉の発展へ	東村山市立東村山第四中学校	二年	櫛野花凜
生きるということ	東村山市立東村山第五中学校	二年	秋本未来
一緒に遊ぼう！	羽村市立羽村第二中学校	二年	横田葵
一緒に生活していたから学べた事	あきる野市立五日市中学校	一年	立石糸

最優秀賞（東京法務局長賞）

心のボルトになって。

武蔵村山市立第五中学校 二年 途田空良

「じいちゃんのあしには、ボルトがうまっているんだよ。」

「ボルトって…なに？」

「ふとくっておおきいネジだよ。」

私が幼稚園に通い出した頃だったと思う。父に何かの話の途中でこう教えられた。まだ私も幼かったし、それがどうした、じいちゃん、かつこ良いじゃないか、とふうん、で終わっていた。

私の父方の祖父母は北海道の人だ。いつもおだやかでおちゃめな私の祖父。十年程前までは郵便局に勤めていた。祖父の住む地域は北海道の中でもかなり積雪の多い所。そこで毎日、郵便物を配達していたかつこ良いじいちゃんは、視界をさえぎる程の雪の降りしきるある日、配達バイクで横転して大怪我を負った。その時の入院生活、複数回におよんだ大手術を今では祖父も祖母も物凄く明るくとびきりの笑い話として話して聞かせてくれるけれど、きっと想像を絶する大変な思いをして、言葉では表せない程のカラダとココロの痛みを耐えてきたんだと思う。その怪我で祖父の足にはボルトが埋まり、祖父が外出の時、必ず身につけているウエストポーチには『障害者手帳』なる物が常時待機している。

帰省した私を北海道の名所に連れていってくれる時、自慢の家庭菜園で収穫を手伝わせてくれる時、一緒にコンビニに行ってくれる時、庭で花火をしてくれる時、じいちゃんの歩き方は少しカクカクしている。歩くのもそんなに速くはない。全身を使ってとにかく一生懸命歩くじいちゃん。でもそれはカラダの事じゃなく、祖父の真面目で温厚すぎる性格がそうさせているのかと勝手に思っていた。

昨年帰省した時、みんなで札幌へ遠出した。劇団四季の札幌での公演を観たい私に祖父も祖母もつき合ってくれた。祖父達の住む町からしたら、札幌なんて外国みたいなものだ。大都会すぎて、サバンナのしまうまみたいにキョロキョロしてしまうじいちゃん達。自分達の町には無い人ばかり。エスカレーターに乗る時、周りの人の流れに自分のスピードがじゃまにならない様に七十才を過ぎた祖父が気を遣っている姿に私の心はざわざわした。

その日観劇したミュージカルは『ウィキッド』。私はすでに複数回観ている大好きな演目だ。物語の主人公は生まれつき緑色の肌を持ち、そのせいで周囲から疎まれ、

笑い者にされ、孤立してしまっている魔女。しかし彼女は絶大な魔力を武器に異質な物を排除するまやかしの社会と対決する。劇中、魔女は自分の大切に思っている人にこう伝える。

「私と居ると、恥ずかしいでしょ。」

魔女は周りに迷惑をかけない様、いつだって精いっぱい気を遣う。私の左隣で目ばたきをたくさんしながら、真剣にステージを見つめる祖父。その手が無意識に自身の太ももをさすっているのが目に止まる。何だか不思議と物語の中の魔女と私の祖父が重なった。二人は同じ様に世間に気を遣っている。それは社会の大多数の人が持っているもの、できることが自分には欠けているという意識があるから。でも魔女には誇りに思っている魔力と深い愛がある。祖父には私がどれだけ自慢してもしたりない周囲に対する深いやさしさがある。劇中で魔女が受けていた様ないわゆる邪魔者扱いを祖父の足も受けたことがあるのだろう。だから私達には怪我にまつわるアレコレをおもしろ話としてしか話さないのだろう。

帰京してたまたま読んでいた新聞で『ヘルプマーク』が紹介されていた。祖父の様に外見からは分からない内部障害のある方、難病や妊娠初期の方などが援助を得やすくなる様、助け合いツールとして啓発活動が行われているという。現在は十都府県でしか導入されていないが、この程日本の国内規格として登録され、二〇二〇年の東京五輪・パラリンピックに向け全国的な広がりが期待されている。北海道では一部の地域でしか配布されていない。障害者手帳や障害者駐車許可証を提示する必要のある場面で決まって申し訳なさそうにする祖父。自分の足は自分の不注意による怪我のせいなのに…という点で恐縮しているからだと思う。いざヘルプマーク、となっても、きっと携帯することだけで「なんだか悪いね」と細くつぶやくのだろう。

この世に生を受けている人、一人一人にはその人にだけ備わるとびきりの美点がある。そして欠点もある。違いを認め合う優しい社会、未来に向かっていきたいと強く思う。

ヘルプマークの様な提唱がもっと様々、多方面から挙がってくる日本で二〇二〇年を迎えたい。祖父には東京に来てもらって一緒に五輪・パラリンピックを観たい。周囲に遠慮せず、じいちゃんのペースで歩いて。私はその横で。

じいちゃんの心のボルトになって。

最優秀賞（東京都人権擁護委員連合会長賞）

地域で守る子供の人権

新宿区立新宿西戸山中学校 一年 池田麻里子

私が小学校四年生のとき、近所のアパートの一階に母親と保育園年長の女の子が引っ越してきた。引っ越してきたその日のうちに二人は私の家にお菓子を持って、挨拶にやってきました。女の子はメガネをかけた可愛い子だった。母たちの会話では、母子家庭だと言っていた。近頃は引っ越しても隣近所に挨拶する人が少なくなっているのだから、きちんとしている人だと思った。また一方でその母親の髪の毛が金色に染められていて驚いた。しかし、意外に話し方も丁寧で感じは良かった。引っ越してきた理由は、近所の小学校が新宿区内の小中学校の中でも評判がいいと聞いたからだった。その女の子を是非入学させたいと思って、確実に入れるこの区域に移ったという話だった。以前から希望の学校に入学する目的で引っ越ししたり、祖父母の家に住民票を移したりすることは、よく聞く話だったので、何も不思議に思うことはなかった。むしろ、教育熱心で常識をきちんとわきまえているお母さんだと感じた。

挨拶の後、家に戻った母は心配そうな顔をしていた。どうしたのかと尋ねると母は、母子家庭で、うどん屋で働き、あの部屋の家賃を払うには無理があると言った。私はそのことを気にもとめず、女の子が小学校に入学するときに小学校のことを教えてあげるのがただただ楽しみで、新しく妹ができたような気分だった。

親子が引っ越してきてしばらく経った頃から朝、昼、夜関係なく毎日母親の怒鳴り声と子供の泣き声が聞こえるようになった。しかも、アパートの窓も、私の家の窓も閉めているのに関わらず、窓越しに耳に入ってくる。そのうちにその声は家の中だけにとどまらなくなった。玄関先でも「くず」「バカ」「のろい」などと言い、準備が遅い女の子をしかりつけていた。母親が興奮して、女の子の頬を平手打ちにしたり、靴や物をぶついたりしているのが私の家の窓からもよく見えた。その様子はしつこく、しばらく続いた。そこで私の母がわざと様子を見に行き、お母さんの興奮を止め、女の子が激しく怒られることが少なくなるように気をつけた。

私はニュースで、親が子供を殴って怪我をさせたり、暴言を吐いたりする「虐待事件」を知っていた。だがそれは、どこか遠い、自分に関係のない話だと感じていた。実際には、身近な近所の家庭で起こっていて、自分の目で世の中には子供を平気で殴る親がいるということを見て、とても衝撃を受けた。それが一ヶ月程続いた。ある日

の夜中に男性の酔っぱらいがアパートのドアを何度も叩きながら怒鳴っていた。警察官が来て男性は注意され、女の子の父親だと分かった。父親が母親に、母親が子供にというように自分のイライラを弱い者に八つ当たりしていることに気づいた。それで、母子家庭になり、お母さんが女の子に八つ当たりするという状況になってしまったのだ。私の家でも毎晩話題に上るようになり、児童相談所に連絡するという話になった。数日後、児童相談所の職員が男女二人で何度も訪ねてきた。職員と母親とはもめているようだった。母親は毎日イライラして、子供の笑顔も引っ越してきたばかりの頃のように見られなくなっていた。そして、数ヶ月後にはまた引っ越して出ていった。最終的に家賃は全額支払えなかったそうで、「貧困生活で圧力がかかって若い母親は大変だったのだろう」と母は言っていた。また、「子供が憎かった訳ではなく、少し経験と知識が足りなかったのだろう」とも母は言っていた。

私はこのことから子供に暴力をふるうことで、子供の人権を侵害する親がいることに衝撃を受けた。しかし、どんな母親でも家が貧しく、若く孤独で気持ちの余裕がなければ、同じようなことをやってしまうのだろうとも思った。つまり、このような問題はどの家庭で起こっても、おかしくないということだ。そのため、孤独な母親が悩みを相談できる施設がもっと必要だと思う。また、今回のように周りからの目というものも大切だと思うので、アパートや住宅など、人の入れ替わりが激しいところでも、常に近所の人の名前と顔を把握しなければならぬとも感じる。

しかし、不幸にも虐待にあって死んでしまう場合もある。少子化で核家族、離婚して孤立し、貧困になってしまう母親。私は今回のことから母親だけが責められる問題ではないと思う。社会全体で、その地域で、しっかりと向き合い、どう子供を育てればいいのか考え実行することこそが、子供を育む穏やかな環境を作る。このようにして児童虐待を元から減らすことが、子供の人権を守っていくことに繋がると私は考える。

最優秀賞（東京新聞賞）

探せなかった四つ葉のクローバー

星美学園中学校 二年 剣持夢有

『広い広い飛行場。この中に一つでも四つ葉のクローバーがあったなら……』

これは祖母の兄が、現在の鹿児島県にある知覧市から特攻隊として飛び立つ前に、家族に宛てて書いた手紙（遺書）の一文です。

茨城で生まれ育った祖母の兄は、特攻隊の出兵の赤札が来て、家族にどこから飛び立つのか知らされることなく、飛行場へ向かったそうです。

今まで家族として仲良く生活していた兄が突然戦地へ出兵していかなくてはならない。私にもたった一人の兄がいます。私が悩んでいたり、勉強がわからない時、何でも気軽に相談できる大切な、優しい兄です。

相撲部の遠征や、学校行事で留守にするだけでも、寂しく思うのに、帰って来るかわからない出兵、しかも突然に理由もなく、若く、健康であるというだけで、国の命令。私ならパニックになり、下の弟妹達と「行かないで」と大さわぎになってしまうことと思います。

戦争当時の人達は、本人はもちろん、家族もがまん強く、辛抱強く、お国の為。天皇陛下バンザイで、辛くても、涙を見せず、国の定めに従って生活していたことを聞き、私だったらどうなるのだろうかと考えます。

たぶん、今の人達では、まず、出兵と言われても、本人は逃げ出してしまうであろうし、親、兄弟も納得いかないに従う人は少ないのではないのでしょうか。

『広い広い飛行場。この中に一つでも四つ葉のクローバーがあったなら、飛び立たず、家族の元へ帰ることができるのだろう。』

先立つ不孝をお許し下さい。』

と、家族へ、自分が自らの意思ではないにも関わらず、親より先に死んでしまうことを謝る文でしめくくられていたそうです。

きっと滑走路の周囲にはたくさんのクローバーの畑が続いていたのでしょう。その中に、四つ葉のクローバーが一つでもあったならと、飛び立ちたくない気持ちを、四つ葉のクローバーに託し、残りわずかな時を、四つ葉を探すことで、故郷にいる大切な大切な家族を思い出しながら手紙（遺書）をしたための。決して飛び立ちたくないとは言えない厳しい境遇の中、とうとう、願い叶わず、四つ葉のクローバーを見つけ出せずにその日を迎え何

とも無念であったことでしょう。

今、公園や土手に行くと、妹や母と、よく四つ葉のクローバーを見つけては幸せのお守り位の軽い気持ちで探している私達

祖母とも一緒に探したことが何度かあります。見つけた時、

「これが知覧にもあったらねえ…。」

独り言の様に小さな声で祖母がつぶやきます。四つ葉のクローバーの重みが私達とは違う様です。

結局、手紙を残し、特攻隊とし、自分の役目を果たした祖母の兄は、土という形で帰国したそうです。

「これが息子さんの亡くなった国の土です。」

と言って、一つの入れ物が家に届きました。開けてみると、兄とわかるものは何一つ、骨すら入っていませんでした。

その時、祖母のお母さん、私の曾祖母は、気丈に、

「ありがとうございます。」

と頭を下げ、静かに冷静に受け取ったそうです。

戦争という言葉で、家族の死も、黙って容認する時代。認めざるを得ない時代。決してそんな惨禍を繰り返してはならないと思います。

戦時中の親だって兄弟だって、子供が殺され、兄弟が死に、悲しくない訳はないのです。今の私達同様、辛さも悲しさ、寂しさもあったはずです。それを、戦争というたった二文字の言葉で、肯定されてしまう時代だったこと。

戦争を知らない人が増加する中、絶対に戦争中の体験は風化させてはいけないことだし、私達が受け継ぎ次の代、またその次の代へと残していくべきであると思います。そして、その悲惨さを受け継ぐ事で、二度と戦争が起きない時代を作ってゆくべきです。

祖母が元気だった頃、祖父と母と知覧へ行き、特攻隊平和記念館を訪れ、やっと若くして旅立った兄に会えた気がしたと涙したそうです。本当なら、帰りたい。みんなに会いたいと書きたかっただろうと祖母が言っていたことを母から聞いた事があります。

知覧に行き、ここから飛び立っていったのだろうと想像し、兄に会えた気分になっていた祖母も五年前に亡くなり、今は天国です。

きっと今頃、お兄さんと出会え、楽しい思い出話をしたり、私達と探してくれた様に四つ葉のクローバーを探している事でしょう。

私も四つ葉のクローバーを見つけたら、祖母の兄や祖母を思い出し、世の中の戦争を考え、平和を願っていきたいです。

優秀賞

支え合う社会

東京女学館中学校 三年 井本奈々

私には、四つ離れた障害のある妹がいます。生まれつき目も見えず、耳も聞こえません。世間ではそういう人を盲ろうと言います。更に、妹は四肢麻ひと言われ、小学校に上がるまで歩くことができませんでした。それを聞くと世間一般では「可哀想、大変」と思うでしょう。しかし、私にとって妹は妹なので特別扱いはしません。可哀想だとも思いません。薄情者だと思われるかもしれませんが、それは妹が可哀想な存在ではないからです。誰が障害があると不幸と決めたのでしょうか？幸せか不幸かは本人が決めることであり、周りが決めることではありません。私の妹は毎日よく笑ったり、怒ったり、悪ふざけをしたりと、とても楽しそうにしています。家族からも、学校の先生からもかわいがられ、幸せいっぱいです。

では、全く目も見えず、耳も聞こえずでどのようにしてコミュニケーションをするのだろうか？と思うかもしれません。妹たちのような先天性盲ろう児は、行動や表情が一番の話しことばです。ですから注意して見ていなければ彼女たちのサインは見逃してしまいます。妹は身振りサインとオブジェクトキューを使ってコミュニケーションを取ります。身振りサインとは「ご飯」と言ったら口に手を当てる、オブジェクトキューとは活動を連想させる具体物やその一部を使って伝える、という方法です。他にも、「飲む」であればペットボトルを触らせる、体育であれば赤白帽を触らせるなどがあります。盲ろうだからといって、全くコミュニケーションが取れない訳ではなく、どのようなコミュニケーション手段でも本人と理解しあえれば会話は成立するので

す。盲ろうの人に一番大切なのは、これから何をするのか、どこに行くのか事前に伝えることです。といっても、私は妹にサインを入れなくてよく母に注意されてしまいます。それでも妹は姉の私を受け入れてくれます。ここまでの話だと仲の良い姉妹のように感じるかもしれませんが、けんかもしばしばします。私が少し意地悪をすれば妹も負けてはいません。かみついたり、ひっかいたりしてきます。母も特に怒ったりはしません。なぜなら、ごくどこにでもある姉妹の光景だからです。勿論、けんかをすれば目が見え、力の強い私が勝ちます。ただ私が唯一妹に勝てない所があります。それは、真っ暗闇の空間です。

以前、私は真っ暗の中を歩くという体験をしました。妹は感覚を頼りに動くので、真っ暗闇の中でも普通に動き回ることができます。一方、常に視覚に頼っている私は、暗闇では身動きが取れず、妹を頼りにして歩くしかありません。この時ほど、妹を頼もしく思ったことはありません。ですから、光のある世界では目の見える私たちが彼女を支え、暗闇では彼女を頼るといったようにお互いが当たり前のように支え合います。

私はいつか健常者も障がい者も互いに支え合う住みやすい社会になることを望みます。そして一人一人が自分がやってもらったら嬉しいと思うことを誰もができるような社会に特別ではなく、ごく自然になってくれると嬉しいです。

優秀賞

見えない心の壁

練馬区立開進第二中学校 三年 長島りな

私が小学五年生の頃、母から『五感をフルに働かせて目の見えない人と公園の秋を探しに行こう』というイベントがあるから一緒に行こう」と誘われました。私は目の見えない人にどう接していいか分からず、乗り気ではなかったけれど、「話さなければ大丈夫かな」くらいの気持ちで行きました。

けれども私はこのイベントに参加して自分の中の見えなかった心の壁に気がつくことができたのです。二人の全盲の方と参加者として園内の散策に出かけたのですが、私がまず驚いたことはお二人の豊かな感受性でした。枯葉を踏みしめる音や風の匂い、樹木に触れる時の手の感触など視覚以外の全ての感覚を研ぎ澄ませて自然が発するたくさんの声を受け止めていました。雨の前の風の変化や雪の朝のしんとした静けさも目には見えなくても空気や音で分かるのだそうです。

それまでは視覚障害の方に対して、どこかで「かわいそう」と思って見ていたところが正直ありました。しかしお二人の本当に素敵な笑顔を見ていると、それは私の勝手な思い込みだったと思うようになりました。目が見えなくて大変なことがあるけれど、幸せとか不幸せとかはその人の心が決めることで障害があることが不幸ではないのだ、ということをお二人の生き生きとした表情やお話しかから伺い知ることができました。

介助の方に「何か見つけたら教えてあげてね」と言われたので、少しドキドキしながら「ドングリです」とその人の手にドングリを乗せて話しかけてみました。すると「素敵な秋を見つけましたね」と優しい笑顔で答えてくれました。心が通じ合えたみたいでとても温かい気持ちになったことを覚えています。

視覚障害の方とコミュニケーションをとるには点字や手話などができなくても、その人のことをもっと知りたいという気持ちさえあれば通じ合うことができるのだと知りました。そして、心がつながった時の嬉しかった気持ちを思い出して、私も何かお手伝いができないかと思うようになっていきました。

私の家の隣にはTさんという六十代の耳の聞こえない男の人が住んでいます。おばあさんと弟さんの三人で暮らしていましたが、数年前におばあさんが亡くなって、

その後、目が見えなくなると聞きました。弟さんが会社に行っている間、一人でいることも多いようですが、私は気になりながらも「介助の人が来てるし、部活で忙しいから」と言い訳をしながら何もせずに過ごしてきてしまいました。それにTさんは眼鏡をかけているし、洗濯物も自分で干しているから、少しは見えているのだらうと思っていたのです。

一年程前から新しい介助の方が来るようになり、何度か顔を合わせているうちに少しずつ簡単な手話を教えてくださるようになりました。その方の旦那様が耳が不自由なので、周りの人にも、聾啞者のことを知ってほしくて子供たちに手話を教えているのだそうです。

ある時、庭のキンカンの実を「のどの薬になるですよ」と介助の方が一つ採ってTさんに渡すとパクッと口に入れてモグモグと食べてしまいました。「あら、食べちゃったの。美味しかった」と介助の方が聞くと「にがい」という手話をして顔をしかめて見せたので、何だかおかしくなって三人で笑ってしまいました。Tさんがこんな素敵な顔で笑うことをその時に初めて知りました。

少し見えると思っていた目は明るい光にも全く反応しないということでした。眼鏡をかけているのは外を歩く時、木の枝や虫などから目を守るため、洗濯物が干せるのは物がある場所を覚えていて、手で触れて確認しながら干しているということでした。私は隣りに住んでいるのに知ろうとしなかったから何も知らずにきてしまったこと、目の見えない人は洗濯物を干すことができないのではないかと間違った思い込みで人を判断してしまっていたことを恥ずかしく思いました。

昔は視覚障害者を「めくら」という蔑称で呼び、差別していた時代があったそうです。けれどもどんな障害があってもお互いを受け入れて協力し合い、みんなが暮らしやすい環境を作っていく、そんな当たり前の社会つまりノーマライゼーションという考えが時代と共に進展し、障害者福祉の法律が整えられてきました。それなのに障害者に対する差別や偏見がなくなるのは、無関心や無理解という私達が心の中で知らぬ間に築いてしまっている壁なのではないかと思いました。まず関心を持つこと、そして知る努力をすること、そうすればお互いの心の壁をなくす本当の意味のバリアフリーが可能になっていくのではないのでしょうか。

障害がある人も「してもらえばかりではなく、してあげたいと思っている」と介助の方からお聞きしました。今度Tさんにお会いしたら思いきって「友達になって下さい」という手話を教えてもらおうと思います。

優秀賞

第一步

練馬区立関中学校 三年 雨宮二葉

私は小学三年生の時に父の仕事の関係でアメリカへ引っ越すことになった。行ったことのない新しい世界を経験できるということに期待はあったが、親しい友達や親戚と別れ、言葉や文化が全く違う国へ行くことはどういうことなのかを私はよく理解していなかった。

アメリカの小学校で白人、黒人、アジア人、ヒスパニックをはじめとした多様な人種を校内で見る光景は、日本人しか見ない日本の学校とは全く違うものだった。先生にクラスの前で紹介されたとき私は自分が外国人になったと感じ、この社会にうまく入れるかと不安になった。しかしそれはすぐに取り越し苦労だとわかった。私はほどなく社会の授業でメルティングポットという言葉を学んだ。様々な人種や文化が溶けあい、新しい生活文化を形成している「人種のるつぼ」という意味である。私のいた学校はメルティングポットそのもので、私が外国人だからといってクラスの友達に特別扱いされることはなく、ポットにうまく溶けこむことができた。

たくさんの人種の友達は、ただ肌の色や見た目が違うだけで、中身は日本の友達とあまり変わらなかった。体育が得意だったり、算数が苦手だったりすることさえも同じだった。皆が同じ事を学び、同じ場所で遊び、同じ空間で一日を過ごしていることが、私にとって当たり前になった。白人とヒスパニックの親友ができて、それぞれの母語や国籍が違って何とも思わなかった。見た目も中身も違う事が普通で、それを良いとも悪いとも思わずただそういうものだと思うようになっていた。

しかし、五年生になって歴史の授業で人種差別について学んだとき、私の周りを見る目に変化が起こった。その授業はアメリカの歴史上での差別や偏見の問題について考え、その後の社会の動きについて学ぶものだった。それ以来私はあることに気づくようになった。学校の用務員、マンションの作業員、ショッピングモールの清掃員はたいてい黒人かヒスパニックであるということだ。これらの仕事に限らず、一般的に汚い、危険だと思われる仕事、人々が進んで就こうとしない職業に黒人やヒスパニックが就いていること、アメリカに来た当時は知りもしなかったことに気が付くようになったのである。人種差別について学ぶことで、私は確かに差別が良くないものであることがわかった。またその授業は同時に私に「人種」や「差別」、「偏見」という概

念を与え、人々の背景にそれが常に付きまとっていることを考えさせた。同じ教室で学んでいる白人も黒人もアジア人もヒスパニックも皆同じなのに、社会への出口が決まってしまうことに違和感を覚えた。

二〇二〇年には東京オリンピックが開催され、日本に多くの外国人が訪れるだろう。日本の幼い子供達はかつての私がそうだったように様々な人種の人々を目の当たりにする。

そこで私は疑問に思う。私のようにどの人種も皆同じであることを知った後に社会での立場が違っていることを知ったら違和感を覚えるだろう。だが教科書で人種差別について学んだだけで同じように感じるだろうか。どんな人種であっても同じであることを知らないのだから、社会の待遇に違いがあることに違和感を覚えられないかもしれない。

私はこの「違和感」がカギだと思う。もし子供達に他の文化にもっと触れ、外国人と出会う機会が増えていけば、差別について学ぶ前に、外国人に関して自分の視点を持つことができるはずだ。幼い子供達は、自分が置かれた環境に順応することを知っている。その環境を疑ったり変だと思ったりせず、そういうものだと思い、受け入れる力を持っている。もし外国人に会って、初めて違う人種を見たとき、驚くことはあっても偏見の目を持つことは知らないはずだ。

東京オリンピックを三年後に控えた今、私達は人種差別の歴史ををどのように子供達に教えるべきかをしっかり考える必要がある。

私達が目指す国とはどんな国なのだろうか。いくら皆平等だと唱えても、法律上で差別を廃止しても、知識だけではこの大切な違和感は覚えない。これは人種差別だけではない。病気や障がい、国籍や生まれなど、自分ではどうしようもないことで差別されてきた人もそうだ。今なお残っている差別の考え方に違和感を覚えることで、その跡を消す第一歩が出るのだ。私がかかっているこの違和感をどのような一歩にするのかが今問われている。

私はそれに声をあげて他者へ伝えることで応えたい。自分の思いを言葉に直すことで心の中で感じていたもやもやした違和感がはっきりとした問題意識に変わる。そして他者へ伝えることで私の経験を共有できる。ただ知識としてこの違和感をもつだけでは差別の連鎖を止め、跡を消すことはできない。私がこの経験を声にすることこそが第一歩であるのだと思う。そしてこの作文がその第一歩なのである。

優秀賞

「障がいとの戦い」

神津島村立神津中学校 二年 松江丞の進

なぜ僕が自分の障がいのことを題材にしたのかというと、僕のことを皆に知ってほしいと思ったからです。でも僕も僕自身のことを分かっていませんでした。だから夏休みに母に聞き、初めて自分の障がいについて知りました。

僕は「毛細血管拡張性運動失調症」略称 ^{エーディー} A T という病気です。A T は珍しい病気です。日本ではおよそ十万人に一人という確率で発症するといわれています。この病気は運動神経を司る小脳の働きが低下していく病気です。そうすると体のバランスがとりにくくなるので、歩く時のふらつき、手足の震えなどの症状がでます。また、免疫系にも影響があり、感染症やがんにかかりやすくなります。そのため生存率は極めて低く、成人を迎えられる人は少ないそうです。

僕は自分の病気について知らなかったので、きょうだい以外に遊びに行ったりすると、何で一人にするんだと怒っていました。他にも、小さい時は走ったり友達とサッカーをしたりできたのに、大きくなるにつれてできていたことがだんだんとできなくなっていくことに悔しいと思ったり、きょうだいや友達をうらやましいと感じたりしたこともありました。でも今回自分のことをしっかり知ることができたので、自分の障がいと向き合っていこうと思いました。

そこで、僕は「障がい」とは何か考えました。僕には毛細血管拡張性運動失調症という病名があり、障がい者手帳という国からの証明書もあります。しかし、「障がい」とは目に見えるものだけではないと思います。小さくとも誰もが自分の「壁」となる障がいをもっているのではないのでしょうか。その人にとって苦手なこと、例えば走ることや人と話すこと、歌を歌うことなどはその人にとっての障がいだと思います。だから誰にでも障がいはある、僕はそう思います。その障がい大きいか小さいかの違いなのです。

からだが不自由なことで人よりもできないことが多い僕にも頑張っていることがあります。それは写真をとることです。六年生の時に応募したコンクールに入賞したことがきっかけで、中学生になってから写真同好会に入って、本格的に写真をとる始

めました。そんな僕の将来の夢はカメラマンになることです。同じ病気の人を、子どもたちを、世界中の人を、勇気づけられるような写真をとりたいというのが僕の夢です。しかし、夢を追いかける途中には、たくさんの「障がい」が行く手を邪魔すると思います。それでも僕は決してあきらめずに一つ一ついねいにのりこえていきたいと思っています。

僕は三歳の時に十四歳まで生きられるかどうか、と言われたそうです。母は悲しんだそうですが、僕はそれを初めて聞いて悔しい、絶対十四歳の誕生日を迎えてやると思いました。それと同時に、同じ病気で三十歳を迎えた知り合いの方はヘルパーさんについてもらって一人暮らしをしているという話を聞き驚きました。僕も大人になって写真をとる、同じような病気の人々の生きる希望になりたいと思います。僕より幼くして亡くなっている方もいるし、皆大きさは違っていても生活をしていくうえで苦手と感じる障がいをもっていると思います。だから僕は病気や障がいを言い訳にしないで、強く、自分らしく生きていこうと思います。

優秀賞

生きているって何だろう

府中市立府中第二中学校 三年 岸 空夏

私のピアノの先生は肺がんを患っている。それもステージ4で末期の状態である。がんという病気は、体中の細胞をどんどん悪い細胞に変えてしまい、各器官が正常な働きをしなくなってしまうという恐ろしい病気だ。日本人の死因で一番多いのがんである。

私は先生からピアノを弾くことの楽しさや、コンクールという目標に向かって仲間と切磋琢磨し、努力を惜しまないことの大切さを学んだ。一年以上前に先生ががん患者となってから、私はそれら以上に大切なことを学び、考えさせられたと思う。生きていく上で大切な三つのことを知ることができた。

ある日、先生からがんになってしまったと言われた。予想もしていなかった言葉に理解が追いつかず、何も言えなかった。しかもその時点でステージ4。末期と言われる状態であった。末期がん。そう聞くと私が小学校三年生のときに亡くなった祖父の姿が頭をよぎる。祖父も末期の状態でがんが見つかった。日に日に痩せ衰えていく祖父に、以前の威厳のあった面影はなくなっていった。怖い。恐ろしい。がんが憎かった。そんな病気に先生がかかってしまった。先生は死んでしまうのだろうか。そんなことしか考えられなかった。すると先生は、

「私はピアノの先生は辞めない。レッスンを続けたい。ピアノが私の全てだから。」と言った。先生らしい決断ではあるが、病院での抗がん剤治療を受けなければ、先は長くはないかもしれないのではと思った。そして、先生は何も悪くもないのにどうして先生ががんになってしまったのか、不平等な世界だと思ってしまった。そんな私の様子を見て思ったのか先生が、

「私をかわいそうだと思わないで。だって、私と空夏ちゃんが明日死ぬ確率は一緒でしょ。交通事故に遭うかもしれないし、災害に見舞われるかもしれない。今生きていることに感謝しなきゃ。」

と先生が言った。その通りだと思った。私はこの言葉から一つ目の大切なことを学んだ。それは、今生きていることそれが奇跡なんだということ。それは先生も私も同じだということ。奇跡はそう簡単には起きないと思っていたけれど、当たり前前に生きていられることが奇跡だった。

そして先生は今まで通りレッスンを続けた。けれど、よく咳き込むようになり頭痛に苦しむようになった。私がピアノを弾いている横で苦しんでいる先生を見て、涙がこぼれそうになった。胸が張り裂けそうになった。私は涙をこらえるのに必死だった。先生は痛みを耐え、私にピアノを教えるのに必死だった。そして私は二つ目の大切なことを学んだ。自分らしく生きることだ。先生は一分一秒でも長く生きることより、一分一秒でも自分らしくピアノの先生をやることを選んだ。もちろん一分一秒でも長く生きたいと考える人が多いだろう。しかし人間はいつか死ぬ。生きている時間を後悔のないよう、自分らしく生きている先生は輝いている。自分らしく生きるという選択肢があること、そしてそれが生きていく上で重要だと考えさせられた。

三つ目に考えさせられたことは、生きるためにはお金が一番必要なのかということだ。以前に先生が、

「私の薬は毎日一万円なの。だから一年で三百六十五万円ね。生きるのって大変ね。」こんなことを言っていた。私はおかしいものだと思った。これではお金持ちだけが生き延びられて、お金のない人は生きられないではないか。生きるためにはお金が一番必要なのか。でも先生を見ていて違うと思った。生きるために一番必要なのは家族の愛だと思う。息子が肩をもんでくれて、痛みが和らいだと言っていた。意外と優しいところもあるのよと言っていたその時の先生は嬉しそうだった。旦那さんが迎えに来てくれて、車いすをひいてもらって満面の笑みを浮かべている。どんなにお金持ちで良い治療が受けられても、家族の愛がなければ寂しくて生きてはいけないと思う。先生の家族はみんなで病と闘っている。そしてそこには強い絆と愛があった。

私は今人生の大きな決断をしなければならぬ十五歳になった。先生から学んだように後悔の残らぬよう全力投球で生きていきたい。私はたくさんの人の命を奪うがんが、治せる病気になることを願っている。私には将来の夢がある。それはお医者さんになって、世界からがんで苦しむ人やその家族をなくすことだ。今生きていることに感謝しながら、夢へ向かって勉強を頑張りたい。がんを治せる病気に私がこの手で変えてみせる。

優秀賞

相手の立場に立って

府中市立府中第十中学校 三年 鈴木大斗

「やったー。でも大丈夫かなあ…。」
障害を持つ方と接したことのない僕に果たして務まるのだろうか。期待と不安が入り混じる。

昨年の一学期。職場体験を希望する職種についてアンケートをとられた。コンビニエンスストアやファミリーレストランは、仕事内容がある程度想像がつくし、高校生や大学生になったらアルバイトをすることも可能だろう。そう考え、同じ部活の先輩がとても良かったと言っていた「福祉」を第一希望に選んだ。

体験先は、希望通り「福祉」の「東京都多摩障害者スポーツセンター」に決まった。同級生二人も一緒だし、いくら障害者といってもスポーツをしているのだ。そんなに重度の方はいないだろう。そんな軽い気持ちでいた。しかしその考えは間違いだったと九月の事前訪問で思い知らされる。

センターに入った瞬間、目を疑った。ギャーギャー言いながら、とても怒った様子の利用者さんがいたのだ。僕には何を言っているのか全くわからなかったが、職員の方は利用者さんの気持ちを一生懸命理解しようとし、穏やかに接していた。職員の方は、皆優しい方ばかりだった。しかし僕は先程の光景が目には焼きついて離れず、不安ばかりが募った。

「やはり障害者スポーツセンターは僕には向いていなかったのではないかな。」
と気持ちが沈んだ。

体験初日。職員の方とのミーティングで、障害の種類によって程度が重い人と軽い人がいるということ、健常者が普段目にしないものがたくさんあること、とにかく利用者さんと仲良くなるのが大事だということを教わった。

知的障害者の方で、僕には「あー、うー。」と言っているようにしか聞こえなかったのだが、職員の方は「ああ、プールに行きたいのですね。」と理解していたことがあった。なぜ分かったのかと尋ねると、

「仲良くなると、自然に相手が何を言いたいのか分かるようになるんだよ。」
と笑顔でおっしゃっていた。格好良かった。僕も理解できるようになりたいと強く思った。

初めての業務は体育館で利用者さん達とバドミントンをすることだった。僕は小学校の時バドミントンクラブに所属していたこともあったし、勝てるだろうと安易に考えていた。しかし予想をはるかに超えて打球は勢いがあり、飛距離も長かった。片腕がなかったり、片麻痺で腕が硬直状態の方も、僕ら中学生を打ち負かして「よっしゃー！！」と言って喜んでいて。強さに圧倒された。僕は障害をもつ方を軽く見ていたことを恥じた。

プールへの工夫も知った。障害者用のプールの底からは、泡が出ている。視覚障害者が泳いでいる時、あと何メートルで壁があるのか分かるようにするためだ。また、プールに入る時の「へり」が広く作られている。車いすの人や足の悪い人がプールに入りやすくするためだという。更衣室にも車いすの方が着替えやすいよう、専用のスペースが設けられていた。至る所に利用者さんの立場に立った設計がなされていることを知り、素晴らしいと感じた。と同時に、市や遊園地にあるプールは、障害をもつ方にとって大変危険なのだということが今更ながら分かった。都立の障害者スポーツセンターは二つしかないそうだ。もっとたくさんできて、皆さんが気軽にスポーツを楽しめるようになって欲しいと切に感じた。

実際に仕事をしてみると、障害を持つ皆さんが、想像以上にとても楽しんでスポーツをされていた。健常者である僕達中学生よりも強い方も多くいらっしやっただ。リオパラリンピックで日本が銀メダルを獲得したボッチャという競技に、車いすで手だけを使って参加する方や、手も使えず口に器具を入れて参加する方もいた。

「今出来ることを思いっきり楽しみなさい。」
これは元弁護士で、脳梗塞により片麻痺になられた方に言われた言葉だ。出来ないことを嘆くのではなく、出来る範囲で楽しんでいる姿を見せて頂き、僕より人生を楽しんでいる気がした。

障害を持つ方のサポートをしようと臨んだ四日間。この職場体験を通じ、僕の障害の持つ方に対するイメージは百八十度変わった。体験をする前の「怖い」と思っていた自分がとても恥ずかしく感じられる。障害を持つ方の前向きに生きる姿勢に、職員の方の全身全霊で向き合う姿に、逆にこちらが励まされた。これからの生き方を障害を持つ方に学ぶことができたこの体験に感謝したい。

優秀賞

地域のつながりと「子ども食堂」

小金井市立小金井第一中学校 三年 後藤むつみ

私の両親は共働きで平日は帰りが遅いです。私が小学生の頃、夕方や夜は大抵兄や姉と一緒に留守番をしていました。兄弟一緒に親の帰りを待っている時はそれ程寂しくありませんでしたが、たまに一人で留守番をしなくてはならない時は、心細い思いもしました。私の周りにも、親が働いていて、子どもだけで留守番をしているという家庭は少なくありません。だから、このことは何も特別なことではなく、「よくあること」だと思っていました。

ところが、この前新聞を読んでいて驚きました。親が働いているなどの様々な事情で、家族と一緒に食事をとることができない、いわゆる「孤食」の子どもと、その家庭を支援する取り組みがあるということです。それは一般的に「子ども食堂」と呼ばれています。

日本には親の多忙や病気、貧困などの様々な事情を抱えた家庭が沢山あります。そのような家庭の子どもは「孤食」になりがちです。「子ども食堂」とは、地域のボランティアが安い価格や無料で食事を提供する民間の取り組みで、様々な事情を抱えた家庭を「食」という面から支えています。全国に数百カ所あるとされ、私の住む小金井市にもあります。

私はこの夏休みに、家庭科のレポート課題で、子ども食堂に見学に行きました。雨が降っていた日でしたが、玄関にはたくさんの靴が並べられていて、明るい笑い声は外まで聞こえる程でした。自転車に乗っている途中で雨に降られてしまった私を、スタッフの方はタオルを持って迎えてくださいました。室内では、遊び回る子、勉強をしている子、ご飯を食べている子、その子ども達を見守る大人など、いろんな人がいて、それぞれが思い思いに過ごしていました。

短い時間でしたが、その中で過ごしていて分かったことがあります。

この「子ども食堂」は、事情のある家庭やその子どもに食事を提供しているだけではないということです。この食堂は「他者とのふれあいの場」「地域との交流の場」「様々な年代の人たちとの交流の場」にもなっていました。地域の大人と話したり、勉強を教わったり、一緒に食事を食べたり。

そういえば、最近、近所付き合いが薄くなり、挨拶をかわすくらい、という関係も

少なくありません。私の兄は小学一年生の時、学童保育が終わった後、しばらく一人で家にいるのが怖くて、向かいのお宅によくお邪魔をしていたそうです。そのお宅にはおばあさんとおじさん、おばさんがいましたが、そこでおやつをいただいたり、時には夕食をいただいたこともあったそうです。兄はこのような近所の支えがあって、心細い時期を乗り越えることができました。今は、そのように、気軽に訪れ、過ごせる近所付き合いは減りつつあるのでしょうか。だからこそ、地域の大人が子どもを見守る「子ども食堂」は貴重な場だと思いました。

さらに、子ども食堂は沢山の大人に支えられているのだと感じました。この事業は無料もしくは安価で食事と憩いの場を提供していますが、施設の運営費や食材が必要になります。そのために、食堂を始めたものの結局すぐに閉めざるを得なくなった所もあるそうです。だからこそ、運営し続けることができるのは、たくさんの大人の「子どもたちが安心して過ごせる場所を作りたい」という願いと努力があったからだと思いました。おいしいカレーライスも、くつろぎながらおしゃべりができることも、それらが実った結果だということがわかりました。

日本は今、子どもたちの当たり前の権利が守られているのでしょうか。「子どもの権利条約」の第二十七条には、「子どもは心や体の健やかな成長に必要な生活を送る権利をもっている」とあります。しかし、今の日本は「子どもの貧困」が大きな問題になっています。二〇一五年の厚生労働省の調べによると、子どもの貧困率は一三・九パーセントで、主要国では高い数値になっています。特に、ひとり親世帯の貧困率は、五〇・八パーセントと高い結果になっています。

貧困という問題の根本的な解決には、国の政治による支援が必要でしょう。しかし、それらはすぐには実施できないし、浸透しづらかったり、多くの問題を抱えていたりすることもあります。だからこそ、地域のつながりが必要ではないでしょうか。

そして、貧困の有無にかかわらず、どんな家庭環境の子どもにも、地域のつながりや大人の支えが必要です。

「子どももお年寄りも若者も気軽に立ち寄れる場所を増やしたい。地域の人同士が相談して作っていったら。」

子ども食堂のスタッフの方がおっしゃっていました。地域の子どもの気を掛けるお節介の精神とそのためへの行動力。それが大切なのだと私は思います。

優秀賞

祖母との記憶

羽村市立羽村第三中学校 三年 中川愛佳

私には忘れられない記憶がある。しかし最近ではあまり思い返すこともなく、忘れつつあった。そんな時、学校で行われた福祉体験がきっかけで改めて思い起こすこととなった。そこでは、高齢者の方々の不自由な生活について、今まで以上に考えさせられた。

私は祖母が大好きだった。初めて言葉を発した時に話した言葉も「ばあば」だった程だ。祖母は私のために服を買ってくれたり、髪の毛を切ってくれたりして優しかったのはもちろん、私が駄々をこねたりした時には、厳しく注意してくれる人だった。祖母の得意なことは料理で、よく祖父母と家族と一緒にブルーベリーを収穫し、それを祖母にジャムにしてみらうことが楽しみだった。その中で一番の思い出は、私が今も続けている硬式テニスを教えてもらったことだ。祖母はとてもテニスが上手かったらしい。娘（私の母）と一緒にダブルスの試合に出場し、活躍していた時期もあったそうだ。私は祖母に教えてもらったことがきっかけとなりテニスを始め、私にラケットを見せるとぴょんぴょん跳ねて嬉しがっていたと言う。

しかし、そんな日常もそう長くは続かなかった。私が小学校に入学したばかりの頃、祖母は筋肉が段々と衰えていってしまう、パーキンソン病という病気を患ってしまった。二十四時間介護を必要とし、日常生活が困難になっていった。私は、前までとても元気で活発だった祖母が急に変わってしまったことで、別人に感じたらしく、段々と距離を置くようになってしまった。

ある日のこと、祖母が高齢者用のおむつをしているのを見かけた。その時の私はまだ、おむつは赤ちゃんだけがするものだと思っていた。そして、私は子供心からか祖母に対して、

「もう大人なのにおむつなんかしちゃって。はずかしい。」
とからかってしまったのだ。それを聞いた祖母はとても悲しそうな、寂しそうな顔をしていた。その時に、なぜおむつが必要なのかを母から聞いた。すると母は、
「おばあちゃんはね、一日中介護が必要で昼間はおじいちゃんが面倒を見ているの。でも、夜中はおじいちゃんも疲れて寝てしまうから、おばあちゃんがトイレに行きたくても気付かないこともあるんだよ。だから、おばあちゃんがトイレに間に合わない

ことがないようにおむつをしているんだよ。」

と教えたそうだ。

祖母の病気の進行はとても速かった。気付けば介護していればできていたことができなくなっていた。例えば歩くことや起き上がること、ましてや食べることもだ。そこで胃ろう（口から食事をとらずに、胃に直接栄養を入れること）を始めるという苦しい選択を余儀なくされた。そして、祖母は私が小学三年生になる直前に、肺炎のためにこの世を去ってしまった。

そして先月行われた福祉体験。車椅子体験、アイマスク体験、高齢者疑似体験をさせていただいた。その中で高齢者疑似体験の、ゴム手袋をして財布の中のコインを取る、という作業があった。手袋のせいで中々取りにくいことはもちろん、特殊なサングラスで見えにくくほとんど手探りで、とてもイライラしていた。すると、そんな私を見ていた指導員の方がこう言った。

「コイン取るの難しいでしょう？あなたは今しか不自由じゃないけど、高齢者の人達はこれが毎日なの。買い物する時とかとても大変なんだよ。それで、はやくしろとか言われちゃうと悲しいよね。だから、そんな高齢者の方がいたら優しい言葉をかけて待ってあげようね。」

私は、まだ小学校に入ったばかりだったあの日、祖母に優しい言葉をかけてあげていたのだろうか。いや、かけていなかった。そればかりか、悲しむ言葉を言っていた。私は、その指導員の方の言葉を聞いて、ひどく後悔した。なぜあんな言葉をかけてしまったのだろうか。そのことを思えば思うほど、自分の軽率な言動への怒りがふつふつと湧いてきた。いくら小さい頃だから、とはいえ私は思いやりの心を持たずに祖母に接してしまっていたのだ。もうこの世にはいない祖母に、私は心から謝った。

今は、祖母の世話をしていた祖父にガンが見つかり闘病中である。祖母と同じく、とても元気だった祖父も、段々と元気を失くしている様にも見える。治療の影響で髪の毛も少なくなってしまった。でも、私は二度と同じ過ちは繰り返したくない。そして優しい言葉をかけてあげたい。祖父がいつまでも幸せでいられるようにサポートしていきたい。私の今までの人生の中で学んだことだ。

祖母との記憶は、これからも私の心の中で生き続けている。

奨励賞

カッコイイお姉ちゃん

中央区立佃中学校 三年 姥 汐里

今日は、三歳年のはなれた姉を皆さんに紹介したいと思います。

私の姉は生まれつき右手・右足・右耳が不自由です。でも、今までの十五年間、私は一度も姉に障害があると感じたことはありません。姉は、自分でできることはなんでもやり、人に同情で手伝ってもらうことが嫌いです。例えば、姉が二個以上の大きい物や重い荷物を持っていて、私とその荷物持とうか、代わろうかと言っても、自分で持つから良いよと言われます。後は、姉がペットボトルを開けようとしていてなかなか開かない時に、私が開けようかと言っても、自分で開けると言われます。ですから、私も普段姉には他の人と同じように接するし、特別な気づかいはしません。

私にとって姉は、良き戦友とも言える存在です。姉は、都内にある芸術の高校で美術を学んでいます。姉は高校で自分を良く理解し自己を持つことで、周囲としっかり向き合っています。それは姉の描く絵にあらわれています。姉の描く絵はいつもまっすぐで日に日に上手くなっていくのが分かります。私も負けてられないとライバル心を燃やせる自慢の姉です。

ある時、姉に対して違和感が芽生えたときがありました。母が私に言った言葉が原因です。

「私（母）の体が弱かったせいでお姉ちゃんに障害を背おわせてしまった」と。私はその時違和感の正体が何なのか、考え続けていました。そして気づきました。それは、姉の障害は、誰のせいでもないということです。姉は障害があるからこそ強くなれたし、自分と向き合うことができたんだと思うからです。ですが、皆が皆、その様を考えはしないでしょう。現に姉には障害があり、どうしても皆と同じように遊べなかったりして、皆と違うと言われて、保育園から中学の十二年間、いじめを受けていたし、姉のことをよく知らない人たちから傷つくこともたくさん言われたそうです。私はそういう、姉を、知りもしないのに悪口を言う人、また悪口を言われて傷つく人が減って欲しいと思います。たぶん、こんな主張をしても悪口を言う人は絶えずいるのでしょう。しかし、私が今ここで主張することには意味があると思うのです。伝え続けていけば届く人には届くはずだと思うからです。

高校へ入学し、自分の障害に対する作品を制作しつづけるようになった姉を見て思

います。中学までの姉は、どこか何かにおびえているように見える瞬間がありました。ですがそれをのりこえた姉は今、まっすぐな表情で周りを嵐のように巻き込み、パッと場を明るくさせるユーモアにとんだ人です。もしそんな姉を見た時に、障害のことですぐ悪口を言う人がいたとしたら、そういう人の方がカッコワルイのだということ、私は知っています。

私は姉のおかげで、障害を持っている方と持っていない方の壁は、相手を知り、寄りそい合えばなくなるのだと気付く事ができました。私は障害がある人の「障害」を個性だと思えることで、人を見る力や世の中を見る視野を広げられると信じています。

更に、差別というのは障害を持っている方々だけにあるわけではありません。福島で起きた原子力発電所の地震による事故により、世間からの福島を見る目は、悪い方に大きく変化しました。福島の人々が一生懸命育てた食物が放射能に汚染されていると思われたり、福島に住んでいる人々までもがあまり良い印象を持たれなくなるということまでありました。例えば、福島の小学校から他県の小学校に転校した子が福島から来たというだけで、いじめにあったり、福島産の漬物を期間限定で埼玉に売りに来た七十代のおじいさんが

「試食どうぞ。」

と差し出すと、その差し出された漬物を見て

「福島で作った漬物なんか食べられるわけじゃないじゃない、汚い。放射能で汚染された食べ物が福島で売れないから来てるんでしょ。」

と言われ、

「大丈夫なんですよ、この漬物はきちんと測定されていますから。」

と頭を下げたり。それでも信じてもらえない時があるそうです。きちんと測定していて問題がなくても、汚いと言われてしまうことはとても辛いでしょう。これも知らないことで生まれる差別です。

ある時、姉は私に言いました。初めての場所で自己紹介するときは、まず、障害者であることを皆に伝えるのだと。なぜなら、障害は立派な個性だからだと。自分から自分のとびらを開く。そういう姉を私はカッコイイと思います。

奨励賞

この人の、ここが好き

荒川区立第七中学校 三年 肥後羽蘭

今朝、いじめのことについてテレビでやっていた。私の中で、あの日の事がふと頭をよぎった。みんな、自然にまわりばかりを気にし、顔色をうかがっている。その中で、いじめについて深く真剣に考えている人はいるのだろうか。私は、あの日を思いだした。

私は、小さい頃から、漫画を書くのが大好きだった。自分でストーリーを考えて、絵にしていって。本当にたのしかった。

小学校一年のある昼休み、事件はおきた。

「こいつ、漫画書いてるぞ！！」

最初は、いじられているだけだと思っていた。私も笑い流していた。しかし、みんなの言葉はしだいにエスカレートしていき、私の目からは涙がこぼれた。なぜ、私がそんなことを言われなくてはならないのか、何度考えてもわからなかった。自分の好きなことを、なぜばかにされなくてはならないのか。自分の好きなものを否定されて、悔しくて、悲しくて、辛かった。

それからもクラスみんなは、私を見つけては漫画をとりあげ、くしゃくしゃにした。ビリビリにする人もいた。もう、漫画は書きたくない。そう思った。くしゃくしゃの漫画を見て、下をむいた。なんでみんなばかにするの。漫画がつまらないから？それとも、私が漫画を書いているから？ばかばかしいからなのかな。自分は弱いんだ。本当に何もできないんだ。そう思うと、胸がしめつけられて、熱くなった。涙があふれたけど、歯をくいしばった。泣きたくなかった。悔しかった。

家に帰ると、お母さんがまっていた。

「そんな顔して、どうしたの。その手にもっているのは何？」

と心配してくれた。するとなぜだか、安心して、涙がどっと出た。たくさん泣いた。そのとき、自分の心がボロボロだったことに気が付いた。あたたかい。お母さんがそっと抱きしめてくれた。

「大丈夫。大丈夫だからね。」

お母さんのこの言葉に、何度もうなずいた。そのあと、お母さんに全部話した。漫画でばかにされて、悲しかったこと。悔しかったこと。漫画をくしゃくしゃにビリビリ

にされたこと。漫画を書きたくないと思ったこと。なぜこんな目にあわなくてはならないのかわからなくて苦しかったこと。お母さんは私の目を見て、何も言わずに聞いてくれた。全部を話し終えると、自分の胸の苦しみが、すうと消えていった。するとお母さんが言った。

「いい？この漫画は、羽蘭にしか書けないんだよ。他の人に、この漫画は書けない。でも羽蘭は何も悪いことしてない。苦しむ必要はないんだよ。」

この言葉を聞いたとき、あのくしゃくしゃになった絵がぬれていた。そして、ぎゅつとにぎりしめた。

もし、あの頃の自分が今の自分だったら、自慢することができる。こんなのもあるよ、と言って、たくさん絵を見せびらかせる。

人は、特別なことをする人に指をさして、「変な人」と言ったり、「ばかみたい」と言う。でも私は、それはおかしいと思う。それはその人にしかできないことがあって、その人はその人なりに、個性を表現している。そして、人それぞれ個性がちがうから、人と人は比べることができない。でも、もちろん理解するには、それぞれ時間がかかるものだと思う。そして自分の個性をどう表現するか悩んだり、自分の個性を主張するには勇気が必要だったり、大きな壁がたくさんある。でも、その大きな壁をこえた先には、自分の個性を認めてくれる人がきつという。そしたら、絶対に報われる。もし、あの時お母さんが認めてくれなかったら、あの時言えなかったら、変わっていなかったと思う。いつまでも背を向けていたと思う。でもお母さんは、しっかり前を向かせてくれた。

私はこれから、「いいところを見つける」ことをしたいと思う。「この人は何だからだめ」とか、「この人のここが嫌」じゃなくて、「この人だからいい」とか、「この人のここが好き」を増やしていこうと思う。そうすることで報われる人はたくさんいる。私がされたみたいに、悩んでいる人を勇気づけられるような人に、私もなりたい。

奨励賞

「話す」ということ

渋谷区立広尾中学校 二年 廣瀬理音

電車に乗っていた時の事です。おばあちゃんと小さな女の子がヒラヒラと楽しそうに手話で会話をしていました。何を話しているのか私には全く分かりませんでした。楽しそうな雰囲気だけは手に取るように分かりました。「話す」とは、どういうことなのでしょう。言葉を交わすことでしょうか？意思の疎通を図ることでしょうか？私は「話す」ということは言葉では言い表せないもっと深いものがあると考えています。

例えば、ものすごく怒った顔で「怒ってないよ。」と言われたら、どう感じるでしょう。怒っているんだ。と感じる人もいれば、怒ってないと感じる人もいるかもしれません。もしくはこの人は私に本心を話してくれないのだと落ち込むかもしれません。そして伝えた側も、怒っていたかもしれないし、本当に怒っていなかったかもしれません。「話す」という行為の中にその本質を見抜ける人は絶対にいないのです。しかもその分だけ言葉には力があると私は考えています。その力は相手を勇気付けることもでき、そして相手を傷つけることだってできるのです。コミュニケーションと人権の中には切っても切れない深いつながりがあるのです。

人権とは人間が人として本来もっている権利です。どの人にも平等にその権利があり、その権利には如何なる人も優劣をつけることができません。人が人らしく自分の思うままに人生を全うするためには、他人を理解する必要があります。なぜなら人は自分一人では生きられないからです。助け、助けられ、笑い合い、泣き合う。人生の中で他人の存在はとても大切なものだと思います。そして他人を理解するために、人は相手と「話す」のです。言葉で、表情で、読み取れる情報全てで相手と向き合います。では、聾の方はどうでしょう？視覚障害の方はどうでしょう？私達健常者はどのように全ての人と会話すればよいのでしょうか。障害があろうとなかろうと、人権の重みは全く同じです。しかし、健常者の中に障害がある方と自分達は違うという思想がある限り、壁は取りのぞくことは絶対にできません。ただ相手の気持ちを知るのにも、自分の気持ちを伝えるのにだって大きな壁が伴うのです。何故でしょうか。全ての情報をキャッチできるはずの私達が相手との間に大きな壁を作ってしまうのです。実際私も電車で手話を操るおばあちゃんと女の子に出会うまではこの「話す」ということの力や重要さなど気にしたこともありませんでした。そして、自分が無意識の中で耳

の聞こえない人と自分の間に、「この人と話すことはできないのだ。」「耳が聞こえなくて大変だな。」「言葉を伝えられないのなら私はこの人を助けることはできない。」と壁をつくってしまった事にも気が付きました。これはあたりまえのこの様に聞こえても、立派な人権侵害なのです。「この人にはこれができないから私はこの人を助けられない。」このような考えが私の中にあっただいという事に気付けたことで、私は少しでも変わろうと、そう思うことができました。「話す」という行為の中でその本質は見抜けません。だからこそ私たちは相手を知り、会話の中の本質に近い所までを見る必要があります。相手と自分に順位を付けて壁をつくってははいけません。壁をつくるという事は自分より相手を下に見ていることと同じです。人権を侵害しているということなのです。

一つの手話を紹介します。両手の人差し指を胸の前でクルクルと交互に回します。この手話の意味は「手話」「話す」。手話をする人と会話をすることは人とコミュニケーションを取るということで相違ありません。人と「話す」ということは、相手と壁を作らずに分かり合おうとすることなのだ。と私は思いました。言葉にする必要はありません。相手を考えること、思い合うこと、それはれっきとしたコミュニケーションなのです。私はあのおばあちゃんの笑顔も、女の子のワクワクしたような表情も忘れることはないと思います。コミュニケーションの様々な形について気付かされました。私達は耳の不自由な方と会話ができないのではなく、しようとしなかっただけなのです。私は今、手話を勉強しています。できないからやらないのではなく、できないからやってみよう、とそう考えたからです。相手を理解しようと一歩だけでもあゆみよること、それは人権を守る大切な一歩なのだ。と私は思います。健常者にとって、障害がある方から見える世界は理解するのが難しいかもしれません。だからこそ壁を壊した先の世界を見て、触れて、聞いて理解しようと一歩ずつ進んでいきたいです。いつか誰もが笑顔で「話す」ことができるよう、まずは自分から触れたことのない世界に触れ、私達に何ができるのか考えていきます。

奨励賞

人

足立区立千寿桜堤中学校 二年 岡野愛理沙

近年、本当に外国人観光客の人が増えたと感じます。テレビでも特集が組まれるくらいですからその数は相当なものなのでしょう。私なんかは自分の生まれ育った日本に興味を持ち、たくさんの国がある中で日本という国に来てくれるのはすごく嬉しいです。しかし冷たい意見もあります。態度が悪い。きまりやルールを守れていない…など。そういった理由でアパートが借りれなかったりその地域になじめなかったりと気の毒です。

特に日本人の偏見が強いのが中国や韓国に対してだと思います。私の母は中国出身です。なので誰かが中国のことを悪く言うと少しチクリとします。小学校の頃、友達が私に

「中国あまり好きになれない。」

と言いました。友達は私が中国と日本のハーフであることを忘れていたのでしょう。もしくは知らなかったのかもしれませんが。私の母は私がまだ小さい時に言いました。

「ハーフであることは自分からは言わないこと。」

私はその時何も感じませんでした。まだ小さかったから。なんの疑問も持たずに言う通りにしていました。でも小学校高学年あたりからどうしてそんなに隠したがるのかと思い始めるようになりました。ある日私の通っている中国語教室の先生が私に尋ねました。

「親が中国出身だといじめられたりからかわれたりすることはありますか？中国人だけの学校にいれたほうが良いのでしょうか。」

先生にはまだ小さい娘さんがいます。私はこの先生の言葉を聞いてなんだか母の気持ちが少し分かった気がしました。そういうことを心配してあんなこと言ったんだなど。

その国のイメージだけでその国の人全員が同じだなんて考え方、私は悲しいです。今日本には私のような日中ハーフの人が多くですし純中国の人も多いです。その人たちの親御さんがみんなそんな心配していると思うと私はもっと悲しくなります。私の友達はこんなことを言ってくれました。

「私、中国好き。行ってみたいな。」

私はその言葉を聞いてびっくりしました。もう日本人の中に中国を好きな人なんて

いないのかなと思っていたのに。そんなことを言ってくれた子は初めてでした。私は気づきました。一番中国に対して偏見を持っていたのは自分自身なんだなと。嫌味でも皮肉でもなく、中国とのハーフが羨ましいと言ってくれる人、中国の文房具は可愛いから行った時にはお土産が欲しいと言ってくれる人、中国が好きだと言ってくれる人。私はこんなにも長く大事なことに気がつかなかったのです。そういった言葉を掛けてもらうとき私は、はじめて中国の血が流れているということに誇りをもてるのです。きっとどんな差別や違いがあってもそれは他人のちょっとした一言で解消するものです。そしてそのちょっとした一言は言われた人からしてみれば「特別な一言」に変わっていくのです。

それぞれ悪いところも山ほどあります。けれどそれはどこの国だってどこの人だって同じだと思います。なぜか私たちは悪いところだけがよく見えます。そんなのは寂しいです。世界で生きていく中で本当にたくさんの人がいてどんなに頑張ってもその全員に会うことはできません。ほんのわずかです。それなのに悪いところだけよく見えて良いところ、大事なところが欠けてしまうなんでもったいないと思います。私は様々な人種の人で満ち溢れているからこそこんなにも面白い世の中が出来上がったのだと思います。なに一つ欠けていいものなどないです。人間という生き物に人種という風流を加えたらこんなにも魅力的になりました。きっと世界中の人たちが日本人のような平たい顔ばかりだったらとてもつまらなくて私たちは退くつしていることでしょう。みんなそれぞれ違うものを持っているから特別であって素敵なのだと思います。

人は確かに完璧ではありません。ときには人との違いに苦しむことだってあります。けれどもあと何度生まれ変わってもどんなに願っても今の自分になれることはないですし、同じ人に出逢えることもないでしょう。自分を含めこの世に生を授かった者同士、仲良くしていきたいものです。

奨励賞

病気を通して学んだこと

江戸川区立葛西中学校 二年 森井百合香

みなさんは先天性胆道閉鎖症という病気を知っていますか。この病気は一万人に一人の確率で発症する難病です。

私は、二〇〇四年十月二十七日に生体肝移植という健康な人の肝臓の一部を切除・摘出し、重症の肝疾患を持つ患者に移植する手術を受けました。父の肝臓を半分もらったおかげで二ヶ月に一度、栃木県にある病院に通院していて、今ではみんなと同じ生活を送っているし、部活にも入っています。でも、小さい頃は入退院をくり返していてみんなと遊んだり、走り回ったりすることができず治療や手術ばかりでとても苦しい闘病生活でした。また、胆管合併症という胆管が狭くなり、胆汁の流れが悪くなるとともに肝臓の働きが悪くなる合併症がでました。この合併症で小学校二年生までお腹に管を付けていました。そのためプールに入ることができませんでした。手術の跡と管が入っていた跡は今でもくっきり残っているし、一生消えることはありません。

しかし、つらい事ばかりではなく、病気を通して学んだことが三つあります。一つ目はたくさんの人に助けてもらった事です。私を助けてくれた先生や看護師さん、ドナーになってくれた父、そして支えてくれた母などにとっても感謝しています。先生や看護師さんは手術の前日にいつも優しい言葉ではげましてくれました。私にはげましの言葉をかけてもらいとても安心になりました。また、入院生活が長いあいだ看護師さんたちがいろいろお世話をしてくれたり、ボランティアの方が勉強を教えてくれたりとたくさんサポートしてくれました。そして母も身の周りのお世話やケアなどをしてくれました。私はこういう方たちのおかげで病気をのり越えることができたと思います。

二つ目は私に対する接し方です。先生はバドミントン部の活動などで私を特別扱いせずみんなと同じメニューで練習をするように言ってくれました。また、友達も普通の子と同じように接してくれました。でも、体育で少し他の子と違う扱いになってしまふところもありますが、できるところはみんなと同じことをやっていきたいです。私は特別扱いが嫌いなのでみんなと同じように接してくれて、とてもうれしかったです。

三つ目は夢を持つことができたということです。私はこの病気になって夢を持つこ

とができました。私の夢は医療関係の仕事につくことです。もし、叶えることができたら、私を助けてくれた先生や看護師さんに恩返しをしたいし、病気で苦しんでいる患者さんがいたら助けたいです。でも、私の今の学力では医療関係の仕事につくことは相当な努力が必要だと思います。実現できるか分からないですが、今できることは今の内に最後まであきらめずに頑張りたいです。

私は、この病気になって後悔はしていません。なぜならこの病気にならなかつたら、夢を持つことができなかったし、先生や看護師さんなどには会えなかつたと思います。また、たくさんの人に心から感謝できなかったと思います。そして自分との戦いに勝つことができ、今の自分へと成長することができたからです。これらのおかげで自信をもち、さらなる挑戦を目指すこともできるからです。例えば、自分がされてうれしかったことを、自分も他の人へ同じようにしてあげたいし、電車などで席をゆずってもらったので、自分より病気が重い人がいたら、ゆずってあげたいと、思いました。また、私は手足が不自由ではないので体の不自由な方や目の不自由な方などを見かけたら、ともに助け合いたいと思いました。

私は外見では分からない内部障がいを持っていますが、人は見ためで判断してはいけなないと思います。赤いヘルプマークというもので内部障がいかどうかを判断することができますが、まだ世の中では一般的ではありません。目に見えない障がいに苦しんでいる人にも優しくできる人が増えるべきだと思います。私のように目に見えない障がいで悩んでいる人はたくさんいると思います。多くの人のために、内部障がいの人のことをもっと知ってほしいと思いました。

一人の命をたくさんの方が、たくさん時間をかけて助けてくれました。見つけた夢を叶えられるように努力して、この命をもっと大切に生きていこうと思いました。たった一度の人生をムダにせず障がいがあっても堂々とできるような人になりたいです。

奨励賞

祖父

大島町立第一中学校 三年 高橋風花

私が一番尊敬している人は、母方の祖父です。私の祖父は、私が保育園の年長の時に亡くなりました。通夜、葬儀の時、私はずっと泣いていました。そんな私を見て叔母が母にこう言ったそうです。

「一番お父さんとの付き合いが短くて、あんな思いもしたのに大好きだったんだ。」あんな思いとは、祖父の病気が関係していました。私の祖父は晩年輕度の認知症を患っていました。私がまだ三歳になる頃くらいに発症したそうです。

祖父が認知症と診断された時、母と叔母は目の前が真っ暗になったそうです。当時、祖父は独り暮らしでした。近所付き合いも親戚付き合いも余りなく、社交的でもない祖父に認知症となった後も独り暮らしが出来るのかと母と叔母は何度も考えたそうです。結果、祖父の意志を尊重した上で、訪問介護を利用しながら、独り暮らしを続けることになりました。

祖父の家から電車を乗り継いで二時間近くかかる所に住む叔母が週二回のデイサービスのある日に祖父を送り出し、遠方に住む母は、毎月数日間幼い私と姉を連れて介護帰省をしていました。母と私達姉妹が会いに行く度に祖父はいつも嬉しそうに迎えてくれました。

「遠くからご苦労様。葉月と、えっと…。」

「風花だよ、おじいちゃん。」

「そうそう、風花ちゃん。いらっしやい。」

祖父は、私より四歳年上の姉の名は覚えていたのに、私の名は忘れてしまっていました。当時の私にはまだその理由がわかりませんでした。

叔母は、祖父に認知症の進行を遅らせるために毎日一行日記を書かせていました。私達が滞在している間、祖父に日記を書かせるのは母の役割でした。

「お父さん、今日の日記を書いて。」

「書く事なんてないよ。」

「今日は私達が来たでしょう。その事を書いて。」

母が日記帳を広げて、祖父に鉛筆を持たせます。

「おじいちゃん、何を書いているの。」

私がおぞきこんでいる中、祖父が日記を書きます。その時、書いていたことが母と姉の名前で止まり、祖父は悩んでいるようでした。すかさず私は、

「おじいちゃん、風花だよ。」

と伝えると、

「そうだ、ふうか、ふうか…。」

そう呟きながらも、私の名前の漢字を間違えており、母親が正しい字に直すように促していました。けれどもなかなか直そうとしない祖父を見て、当時の私は泣きそうになりました。それを見て祖父はようやく私の名前を直してくれ、

「風花ちゃん、今度は間違えないようにするね。」

そういっていましたが、亡くなるまで正確に私の名前を書くことはありませんでした。

祖父は認知症になった後も、クイズ番組などを解くのが得意でした。それが、私にはとても謎でした。なんで、難読漢字が読めるのに、私の名前は忘れるのだろうか、と考えていました。

祖父の就寝後、私は気になったので、母に尋ねました。

「どうしておじいちゃんはあるに難しい漢字がスラスラと読めるのに、私の名前は忘れちゃうの。」

母は私の疑問に対し、

「昔のことや、昔の出来たことは記憶しているのだけど、最近のことは忘れてしまう病気なの。だから、風花の事を嫌いな訳ではないし、おじいちゃん自身も思い出せなくて辛いと思う。」

と、答えました。私は申し訳なく思い、それ以上聞きませんでした。

それから間もなく、私の祖父は亡くなりました。私は誰よりも泣いていました。もう会えないと子供ながらにわかり、とても悲しいと感じました。お通夜の席で、母は親戚の人と話していました。母は、

「認知症になってしまったけれども、娘達には父の事を最高のおじいちゃんとして記憶して欲しかったし、父には娘達との楽しい思い出を作って欲しい一心だった。」と言っていました。

最近、認知症になった親の世話が出来ず、虐待をしてしまう人などが多くいます。これから少子高齢化が進み、親だとしてもどうしていいかわからない人が増えていくと思います。けれど、認知症という病気を思い、辛い思いをしている人も多くいます。だからこそ、家族が症状のことを考え、高齢者が過ごしやすい安心出来るところをつくっていきたいです。

奨励賞

いじめ

立川市立立川第六中学校 三年 張 馨芸

「中国って汚いよな。あいつ中国人だろ。」

「うっわ。きったねえ。」

また始まったと思った。これで何度目だろうと思う。国に対する偏見で自分に悪口の矢が向いてくる。そんな国の偏見から自分にもあまり関わらない人から偏見をもたれて悪口を言われる。幼少の頃の悩みだった。ひどい時は、クラスメイトの女子にも仲間外れにされた。心から悪口がとまることを祈るばかりだ。学校に行く足も重たくて、風邪でもひいて学校を休みたいと思うばかり。先生に言ったら告げ口したんだろと言われていじめがエスカレートするのではないかと恐れてしまう。なかなか先生に言えずにいたことが多かった。最初は気にかけてくれていた友達も、いつの間にかいじめの側になっている。とても孤独に感じて、見捨てられた気分だった。

頼りすぎているのかな。嫌われたのかな。最初はそう思っていた。

「あいつ男子に媚び売ってるよね。ぶりっこすぎてきもい。」

授業移動の時、教室に忘れ物をしていることに気づいて引き返したときに、気にしてくれていた子の声が階段から聞こえた。そんな風に思われていたんだ。とても辛かった。結局、授業に出られなくて、保健室に行って泣きあかした。どうしたのと聞かれても怖くて言えなかった。学校ではあまり男子と関わらない方なのに何故だろうと思った。しかし、何故なのか、すぐに分かった。

「あいつとA付き合ってるんだろ。デブ同士でお似合いだな。」

身に覚えもない話を授業中に男子達が話しているのが聞こえたからだ。相手のA君も困っていた顔をしていた。実際喋ったこともないのにうわさをたてられて絶対嫌なんだろうなと思った。自分がいなくなればいいのにと考えた。何度も自殺をしようとした。自傷行為もたくさんした。

しかし、そんな自分が今生きていられるのは先生に自分の状況を気にかけて言ってくれていた友達がいたからだと思う。たくさんの人が見て見ぬふりをしてる中、その友達はいじめている人たちにやめようと声をかけてくれた。自分の理解者にもなってくれた。先生も、注意をしてくれたりしていた。そのおかげもあって、私に対してのうわさもいじめもほとんどなくなった。

そして、今年の七月上旬の時、とても心に残ったニュースがある。それは、新潟県の中学二年生の男子が自殺したという事件だ。

彼は、担任の先生に嫌なあだ名で呼ばれていると、五月の個別相談で相談をした。しかし、担任の先生は、深刻な問題ではないと判断して教育委員会に報告しなかった。彼の自殺後多くの生徒から、彼が一年の頃から複数の人に悪口を言われていたと指摘があった。

担任の先生も気に留めてくれず、クラスメイトから見て見ぬふりをされた彼はどんな気持ちだったのだろうか。誰も気に留めてくれないのはとても孤独で耐えるのがとても辛い。誰か一人でも彼を気にかけていたのだろうか。気にかけていても自分までいじめられたらどうしよう、という怖さから、きっと声をかけられなかったのだろう。

しかし、さりげなく頑張れって言ってくれるだけでとても心強く感じるのだ。たった一言でも、いじめられている子にとっては宝のような言葉だ。気にかけてくれている人がいる。そして、いじている子もいじめられている子の立場になって考えてみてほしい。自分が何をされたら嫌か、それを考えて人に接してほしい。その言葉を自分が人にかけているのだ。その人がもし自分だったらどう思うのだろうか。

だから、友達に嫌な言葉をかけていないかこれから自分も注意していきたい。そして、いじめられている子がいたら、自分もたくさん声をかけて、自分にできることをしてあげたいと思う。人が死んでからああでした、こうでしたっていうのはおかしいと思う。人が死んだ後から言えるなら、人が生きていたときにも言えたはずだ。見て見ぬふりをするのはいじめられている子にとって一番辛いことだと思う。もしも、いじめに出くわしたら、いじめられている子を気にかけて、勇気を出して一言声をかけてあげたらどうだろうか。

奨励賞

障害者にも平等な人権を

啓明学園中学校 三年 原田桃奈

あなたは、身内や知り合いに、障害がある人はいますか。身近にいないとしても、街中で見かけたことがあると思います。障害にはたくさんの種類があります。見た目では、分からない障害も多いです。中でもよく知られているのは、「知的障害」「視覚障害」「聴覚障害」などでしょう。

私は、生まれつき右手がありません。「先天性関節部欠損」という障害です。

今、あなたは私をかわいそうと思いませんか。ほとんどの人が思ったのではないのでしょうか。不便なこと大変なこともあります。私は自分のことをかわいそうとは思いません。よく、字を書いたり、ご飯を食べる時は、どうしているのかと聞かれます。私は右手はありませんが、左手はみんなと同じなので、左手でほとんどのことができます。右手でも、大抵のことはできるので、感覚的には左利きの人と同じです。お菓子の袋を開ける時はあごなど、違う体の部位を使って開けます。体育の時などは、できなかつたりすることがよくありますが、鉄棒もできますし、縄飛びだってリストバンドを加工した物をつければできます。どうしても、できないことがある時は、家族や友達に手伝ってもらいます。

私は、家族や友達にはとてもめぐまれています。学校行事で、右手を使わなければいけない時には、両親が右手で物を持てるように工夫してくれて、みんなと同じように参加することができます。友達は、私のことを理解してくれているので、私は右手の事でいじめをうけたことはありません。私の右手は、人と見た目が違うだけで、みんなと同じ生活をしています。目が一重や二重の人、背が大きい人や小さい人、みんな違います。双子で顔が同じでも性格が違ったりと、この世界に同じ人など、誰ひとりいません。だから、私は全然かわいそうではありません。

小学生の頃に、私と同じ障害のある人のお話を学校の授業で、聞く機会がありました。その人は、レジで接客の仕事をしていて、お釣を渡したら、「そのお金は汚い」と言われたので、新しいお金を渡したところ、「その（障害のある）手で触ったから汚いんだよ」と言われたそうです。一緒に聞いていた友達は、きっと忘れてしまったのだろうけど、私にはその話が衝撃的すぎて、今でも忘れられません。私も、将来そんなことを言われてしまうのではないかと、安心して働けるのかなど不安や心配でいっ

ぱいになりました。それと同時に、何故同じ人間なのにそんなことを、言われなくてはいけないのだろうという怒りがこみ上げました。障害者も、必死に毎日を生きた同じ人間です。しかし、街中へ出ると周りの人から、ジロジロ見られたりします。自分と少し違う人がいると、その人を見て、気持ち悪いやこわい、かわいそうと言います。私から見れば、ジロジロと見てくる人の方が気持ちが悪いし、こわいと言ってくる人の方がこわいです。「障害があるから、かわいそう」ではなく、同じ世界に生きた同じ人間として、接してほしいです。障害者はいつも、周りからの「目」「非難」を気にしています。私は、堂々と街中を歩きたくても、周りの人に、見られているのではないかと思い右手をポケットにしまっけてしまいます。初対面の人は、私に「手人間」「おまえの手ウケる」「よく手がないのに普通にしているね。私には無理」など心ない言葉を口にします。しかし、手の説明や私の事を理解してくれると、心ない言葉を口にすると人はいなくなります。

あなたは、人の目、言葉を気にして毎日を生きたことがありますか。とてもつらいと思いませんか。障害者への見方や考え方を变えるべきだと私は思っています。もし、障害者をもっと理解し見方を変えてくれたら、障害者は堂々と何もかくさず街中を歩けたり、人の目を気にしてできなかったこともできるのではないのでしょうか。だからもっと障害者について、調べて知ってください。何か少しでも、障害者について知っていれば、理解しやすく同じ人として見れると思います。

世界中の人が、障害者を一人の同じ人間として、平等な立場で接してくれたら、将来自分の就きたい仕事や、やりたいことを安心してできるようになると思います。そんな平等な世界になったら、今まで人の目を気にしてできなかったことや、やりたかったことをして、たくさんのことを経験して人生を楽しみたいです。障害があることで、あきらめていた職業も視野に入れることができると思います。

『この世界に生きる全ての人に平等な人権を。』私は、心から強く願います。

奨励賞

アイヌの知られていない差別

八王子市立横山中学校 一年 茂木咲彌

私は夏休みに祖父母の家がある北海道旭川市に行った。私の母が子供の頃から住んでいた旭川市錦町という場所は、明治時代頃までチカップという地名と呼ばれ、アイヌの人々が住む所だったそうだ。母が子供の頃はまだアイヌの人々が生活しており、学校にもアイヌの子供達がいる、一緒に授業を受けていたと教えてくれた。しかし、私は今アイヌの生活をこの場所で目にすることはできない。昔は、祖父母の家の近くに、大きなアイヌ記念館があり、観光バスが毎日たくさん来た。観光スポットとしてにぎわっていたアイヌ記念館だが、今は土地を切り売りして、目立たない場所でひっそりと営業していた。そのことを知った私はアイヌの歴史を伝えることが途絶えるのではないかと感じ、アイヌの本を読んだ。すると、アイヌの人々に対する差別があることがわかった。

「その昔本州で生活していた和人と呼ばれる人が移住してきた。和人は、アイヌを馬鹿にし、差別を平気でしていた。明治三十二年に北海道旧土人保護法が制定された。しかし土地を与え田畑を作らせ定住させるという施策はアイヌに喜ばれるようなものではなかった。土地の所有権は国にあり、良い所は和人に与え残った原野をアイヌに貸すというアイヌを馬鹿にした内容だった。アイヌを完全にしぼりつけた結果、働くことができなくなり生活意欲を失い、自信がなくなり、自分を劣等視するようになったアイヌができていったのだ。」(『先生はアイヌでしょ』 荒井和子)

アイヌの人々は、自分達の生活の中心である漁猟をうばわれ、迫害を受けていたことが分かった。また、アイヌの人々は、和人から汚い・臭い・毛深いなどと言われ、昭和時代になっても子供達はいじめを受けていたこともわかった。アイヌの差別がある中、一人のアイヌの女性が教師になった。荒井和子さんだ。当時の生徒やその親から差別を受けるかも知れないという不安があったにもかかわらず荒井先生は近文小の先生となったのだ。荒井先生の著書の中で、「アイヌ出て行け。何しに来た。アイヌには教えてもらいたくない。」と、ある生徒に怒鳴られた。全身張りつめていた糸が音をたてて切れ、目の前が暗くなり震えだしたと書いてある。しかし荒井先生は落ち着いてこう言ったのだ。

「アイヌとは本当の人間という意味です。差別している人は本当の人間ではないので

す。なので差別語を平気で使って、人の心を傷つけるようなことはしないことです。」

この文を読んだ時、私は同じ人間として恥ずかしいと思った。例えば、眼鏡をかけている人、毛深い人、肌の色の違う人、障害のある人、どの人も同じ人間なのに差別が生じる人々がいるのはなぜだろうか。

同じ本の中で、アイヌの人々が和人に対して訴えたいことが書かれている。

一つ目は毛深いことが恥ずかしいけれど、毛深い民族だということを分かってほしいということ。

二つ目は人間は全て平等に生活する権利があり、貧しくても皮ふの色が違って、体毛が濃くてもどんな生まれでも、その人の人格に何ら影響を及ぼすものではなく、大切なのはその人がどんな心をもっているかということ。

三つ目は差別のない明るい世の中になって欲しいということ。

四つ目はアイヌに対する差別は自然消滅すると信じて頑張っていることを理解してほしいということ。

最後は歴史を正しく教えて欲しい。

今までアイヌの歴史や生活、差別について調べてきて思ったことがある。それは相手に対して悪口を言うことで差別がおきる。二人以上で言うといじめになる。そして言いかえずと、けんかになり、けんかが大きくなると戦争になるということだ。

今でも日本や世界で差別されて苦しんでいる人がたくさんいる。しかし、相手に対して悪口を言わないで、相手を尊重すれば差別やいじめ、戦争は起きないと思う。相手が悪いと思ったら、悪口を言うのではなく、話し合えば良いと私は思う。このことは差別や戦争だけでなく、日常なことから、世界に関わることまでの全てのことに共通する解決策だと考える。

奨励賞

まず自分から一步、踏み出して

八王子市立七国中学校 三年 申 娜敬

「なんでお前の名前って、そんなに変な名前なの？」
私が、小学生のときにクラスメイトだった男子に言われた言葉です。在日二世の私はこれを聞いてショックを受け、とても悲しくなりました。異国の人の名前が文化によって違っているのは当然なのに、なぜそんなことを言うんだろう。私は言い返そうとしたけど、また何か言われるのが怖くて、言い返せず下を向いてしまいました。その間にも、男子は私の名前をいじって変な呼び名をつけようとしていました。私は、無理矢理笑って小さな声で、

「やめてよ。」
と言いました。でも、その男子には私の心の傷が見えないみたいで、
「あっそ」

の一言で、別の所に行ってしまいました。

その日の夜、父に私の名前はなぜこの名前なの？なぜこの名字なの？と聞いてしまいました。当時、本当に自分の名前に自信がなかった私は、もうどうしようもない問題を父にぶつけていました。すると父は、

「将来、都合が悪かったら帰化してもいいんだよ。」
と言いました。でも、帰化すると父と私の名字が異なってしまいます。たとえ表向きでも家族としてのつながりを失うのは嫌でした。それに、異国の地で私が受け入れてもらえないからというのはとても寂しい気がしました。

中学生になり、私にとってとても嬉しいことがありました。私と同じ在日の韓国人の女の子が同学年にいたからです。しかも、名字も同じで私は本当に驚き、感激しました。同じ境遇の人がいる！私とその子はすぐに仲良くなりました。中学二年の夏休み、その子に誘われて韓国に行きました。それは、在日の韓国人中学生や、ハーフの人、韓国にルーツを持っている中学生なら誰でも参加できるキャンプのようなものでした。そのキャンプには、二百人くらいの中学生が参加していて、人数の多さにとっても驚きました。色んな人と話しているうちにたくさんの友達ができ、私が想像していた以上に多くの刺激を受けました。私はそこで前を向くことの大切さと在日としての自分を見つけました。

三年生になってから私はある女の子に質問されました。

「あのさ、慰安婦問題についてどう思う？日本がいっぱいお金払っているのに、なんか韓国おかしくない？」

私は最初、日本側に立ち意見を言おうとしました。でも、勇気を持って自分の考えを言ってみようと思いました。下を向いていた顔を上げて、私の考えを素直に伝えました。言い終わって、少しの沈黙が怖くてまた顔が下に向きました。するとすぐに、

「そういう意見もあるんだ！ちょっと聞いてみたかったんだよね。ありがとう。」
と、言ってくれました。私の言う事を否定しなかったこと、私の意見としてしっかり聞いてくれたこと、何より私自身が日本と韓国の歴史上の問題について本当の考えを言えたことが嬉しかったです。ほんの数分の出来事で私が一歩大きく成長できたように思いました。

私は、小学生のときに言われたことをまだ覚えています。きっと大人になっても忘れません。根に持ちすぎかもしれないけど、私にとってはつらい言葉でした。自分が思っている以上に相手は傷ついているかもしれない。私は自分の体験を通してそう思いました。

最近、韓国のアイドルが日本でとても人気になっています。表向きの関係は良好でも、過去の出来事が良い関係だったとは言いきれません。だから、入居問題や参政権が認められていないのだと思います。日本から一番近い国なのに、遠い国のようになってしまったように思います。でも私は、今から差別や偏見は減ると思います。グローバル化が進む中で、世界中とコンタクトをとることができるようになりました。相手を知り、理解することで差別をすることはできなくなると思うからです。世界にいる人々はみんな同じ人間です。話をして仲良くなることは誰にでもできます。だから私は、差別や偏見を武力によって解決しようとせず、まず自分から一步、踏み出していきたいです。

奨励賞

超高齢化社会と私

稲城市立稲城第二中学校 三年 高尾奏音

夏の日を楽しく過ごす私に、テレビニュースで見たその事件は全く別世界の出来事のように響いていた。そのニュースとは、三十八歳の男性が老齢の家族を介護していて、介護の中で自分の言うことを聞かないとして数十回にわたる殴打をし、そのお年寄りが亡くなったというものだ。犯人のその男性は人間として絶対にやってはいけない罪を犯した。それも大切な家族に対してだ。私は胸が苦しくなった。

今の日本において、高齢化問題、介護問題はこれから先、目を背けてはならないとても重要な問題であるという。今まで世界のどこの国も経験したことのないスピードで、日本は今、超高齢化社会を迎えようとしている。医療技術が発達するにつれ、今まで救うことができなかつた方の命を救うことができるようになった。特に、脳の病気で亡くなっていた方が今では亡くならず、でも、その後に生活に支障を抱えながら生きていかれる数が増えているようだ。この状態は高齢者で多く見られ、沢山の高齢者の方が要介護状態で生きていかれる社会が今の日本であり、これからさらに増えていくのだそうだ。

一方で、子供たちの数は今、一つの家庭で生まれる子供は二人にもとどかず、私たちが大人になるころは高齢者が多くてそれを支える若者が少ない大変な世の中になるという。

介護は私も経験したことがないけれど、我が家でも七十歳を超えたおばあちゃんと一緒に毎日生活していて、おばあちゃん一人で自分の身の周りのことができるくらいに元気だから良いけれど、もっと年をとったらいつ介護が始まるかわからない。そんな時、家族で大切におばあちゃんのお世話をしあげることが、今まで自分たちはお世話になって育ててもらったのだから当たり前的事だと思った。

介護するというのは、言葉で言うよりもずっと大変で難しい事だと聞く。体が言うことをきかないのは何とか手伝えるとしても、認知症などの頭の病気になった場合には、それを介護していくことがいかに難しいかは、やってみて自分で感じてみなければわからないと思う。

今回の痛ましいニュースの他にも介護に関係する殺人事件は沢山あることも知った。二〇〇六年に京都で起きた殺人事件は、五十四歳の子供が八十四歳の認知症の母

親の介護の看病をしていて、介護するためにそれまで働いていた会社も辞めて貯金を使いながら生活していたもので、いよいよ貯金が無くなってしまい、お母さんを殺して自分も死ぬしかないという覚悟で介護状態のお母さんにその事情を話してから涙を流しながらお母さんを殺して自分も自殺しようとしたけれど、結局死ねずに殺人事件となったものだ。十年後の裁判で、「命を奪ったけれどもう一度母の子に生まれたい」などの陳述に、裁判官が涙をこらえながら「裁かれているのは被告だけではない、介護制度や生活保護の在り方も問われている。お母さんのためにも幸せに生きて下さい。」と執行猶予になっている。

今の日本、私も毎日好きな事をして楽しく過ごしているけれど、ふと周りを見渡せばこのような介護問題で悩んでいる家庭も沢山あるのだと思う。お年寄りがお年寄りを介護しながら生活している「老々介護」が数多いとも聞き、介護施設が少なくて施設に入りたくても入れずに、やむを得ずに家庭でお世話をしながら頑張っている方が多いとも聞く。また、先程の事件のように、介護のために働き場所を失って、経済的に困窮するケースも多いと聞く。

私は今、中学三年生として、これからの日本をどのように進めていけばよいか、これからの日本を考える上でも、もっともっと真剣に考えて、今を生きる人々がより良く生活できる環境で幸せに生きていけるように、今やれることをやらなければいけないと思う。

まだ、考えても解決策を見出すことはできないけれど、まずは自分の家で、一緒に住むおばあちゃんがずっと元気で笑顔でいてくれるように、毎日大切にしていきたいと思う。

超高齢化社会を迎えている日本、みんなが忙しくて、あわただしくて、誰もが余裕なんてなくて、周りの人に優しくしてあげたり、笑顔で接したりするのが難しい環境になってしまっているのかもしれない。でも、難しい問題がそこにある今だからこそ、笑顔でやさしさを忘れない心の通った社会を作っていくことが大切なのだと思う。社会とはひとりひとりの積み重ねから出来ていると思うので、だからこそ私はその一人として大事な笑顔、やさしさを持って毎日過ごしていきたいと思う。

おばあちゃんがずっと笑顔で過ごせる毎日を大切に今日からまたスタートしようと思う。

奨励賞

障害者の匿名報道は人権侵害か

稲城市立稲城第四中学校 二年 千井野睦

一年前の七月二十六日に相模原市にある知的障害者入所更正施設「やまゆり園」であの恐ろしい事件が起きた。犯人の男は元職員で、障害者は生きていても税金を無駄づかいするだけだから殺した方が良く、という衝撃的な動機を語っていた。あれから一年たち、またこの事件の報道が増えてきた。そこで耳にした言葉が「匿名報道」だ。今回の事件で亡くなった方は十九名。その全ての人が、年齢と性別しか公表されていない。日本では、殺人事件において、犠牲者の氏名を公表するのが原則だったが、今回は違った。神奈川県警によると「事件当日に十九人の遺族全員に個別の聞き取りをしたところ、全員が公表を望まなかった。障害者施設での犯行ということも考慮し、特例として非公表とした」とのことだった。今回の「匿名報道」ということを聞いた時、はじめは、被害者が公表したくないのだから、公表しなくても良いと思った。氏名を公表しなくても、事件の悲惨さや重大さは充分伝わるので、ニュースとしての役割は果たしていると思う。しかし、その「匿名報道」が障害者への差別につながり、人権侵害に当たると言う人もいるようだ。とても疑問に思ったので調べてみることにした。

「匿名報道」について反対している人たちは、人間の死に対する差別だというのだ。障害者であろうとなかろうと、命の重さは一緒である。ならば、死んでしまったときの扱い方も同じようにするべきである、と。また、今回の事件で、匿名であるがゆえに「人が殺された」のではなく「障害者が殺された」という印象がより強くなり、自分とは無関係な事件として忘れさられてしまうのではないかと心配する人。他にも、実名がないとその死を悼みにくいと云う人もいる。これらの意見も一理あるが、当事者の意見ではないから、理想論・きれい事である様にも感じる。しかし、知的障害の子供を持つ親の会の全国組織である、全国手をつなぐ育成会連合会の会長は、次のように話している。「育成会は六十年間、『我が子にも人権と幸せを』と訴え、教育機関や移動手段、選挙権などの分野で権利を得てきた。健常者と同じようにと。なのに、今回の様な場合だけ、特別な配慮を求めることはできないと思っています。」と。確かに、それでは、差別というか特別扱いだ。しかし、遺族はそれらの批判が出ることを想定していて、しかしあえて、匿名にしたいと強く願ったのだとしたら、そこには

やはり根深い何かがあり、簡単に平等に報道すべきだと私達が言うわけにはいかないのではないだろうか。「匿名報道」の賛成意見を調べてみた。

遺族の立場で、今回、名前を公表しなかった理由として考えられるのは、障害のある家族を施設に入れていた事への罪悪感だそうだ。障害があるのに、家族で面倒見ないなんて愛情がないだとか、施設に入れるのは税金の無駄づかいだとか。また中には、知的障害者が親戚に居ること自体を隠している家族もあり、公表を拒否したのではないかと、ということだった。なぜ、障害者のいる家族はそのような考えになるのだろうか。やはりそこには、これまでの世間からの差別や偏見があるからだろう。インターネットで「障害者の差別」と検索すれば、様々な事例が出てくる。保育園の面接で、障害者の親は働かなくて良いから自分の子の面倒を見ろと、役所の窓口で言われたり、気持ち悪いし何をするか分からないという理由でレストランの入店を断られたり、親戚に知的障害者がいると遺伝するかもしれないという理由で、結婚が破棄されたり。そのような事例がたくさん出てきて、本当に驚いた。でもそれが現実であれば、私は、今回の「匿名報道」は妥当な判断であるように感じた。そして、次の疑問がわき上がってきた。

なぜ、被害者の実名報道が原則なのか。事件の被害者は、可哀想な存在であるという大前提で、報道されている。しかし、今回の事件のように、何の非もない被害者と遺族に「死んでほっとしているでしょ。」という感想を書き込んでいる人もいる。他の事件では、被害者の私生活を調べ報道し、「自業自得だ。」とか「殺されてもしょうがない。」などという報道があることも耳にする。執拗なマスコミのインタビューや報道で、これまでの生活ができなくなった遺族もたくさんいるという。加害者ではなく被害者の家族がだ。マスコミの報道によって人権が侵害される場合もあることを考えると、私は、事件の被害者が「実名報道」されること自体を疑問に思う。どんな事件が発生したかニュースにすることに、実名は不要だと思う。人権とは、人間が誰でも持つ権利である。それは、障害のあるなしに関わらず、どんな被害者でも同じであると、私は考えている。

奨励賞

これからの日本

稲城市立稲城第六中学校 二年 高山知奈

「六時になったから晩御飯届けに行ってくるね。」

そう言いながら私の祖母は、出来立ての里芋の煮っころがしと鯖の味噌煮をお盆に載せ、慣れた手つきで風呂敷に包み、一つ上の階に住んでいる憲ちゃんおじさんへ届けに行った。

私の祖母は七十歳。二歳上の祖父と二人暮らし。毎日、祖母の弟（憲ちゃんおじさん）の晩御飯を作ったり様子を見に行ったりしている。憲ちゃんおじさんは結婚はしておらず、一人暮らし。十年ほど前に原因不明の難病にかかり、今でも手足が自由に動かない。それで、三歳下の弟のために私の祖母は毎日欠かさず世話をしているのだ。

だが私は、そんな働き者の祖母がとても心配で、忙しそうな姿を見ているとなんだか心がずきずきしてくる。だから私はそんな祖母に聞いてみた。

「ねえ、ばあば。ばあばは憲ちゃんおじさんのお世話をして、大変じゃないの。時々、嫌になってしまわないの。」

すると祖母は、

「ばあばが元気なうちはね。買ってきたお弁当ばかり食べるのもかわいそうだしね。」と、にこりと微笑みながら答えてくれた。

私はその時、憲ちゃんおじさんのお世話をするのは少しめんどくさそうだなと思っていた、そんな愚かな自分を軽蔑し、憎んだ。でも私は祖母の答えに一つの疑問を抱いた。それは、「ばあばが元気なうちはね」という言葉。では、もし祖母の健康状況が急変してしまったら、残された祖父や叔父はどうになってしまうのか。私自身も考えたが、自分だけでは答えにたどりつくことができなかった。

私の祖母のように、最近「老老介護」が多くなっている。老老介護とは、家族の事情などにより高齢者が高齢者の介護をせざるをえない状況のことで、日本のような高齢化社会を形成している国ではしばしばみられるケースである。高齢化問題を考えるには、やはり少子化問題は切っても切れない。「出生数四十二年で半分に」。以前このような新聞の見出しが目にとまった。この言葉を見て、私の目がまんまるに見ひらき、まぶたから飛びだしそうなくらい驚いた。内容には、「二〇一六年に生まれた子供の数を示す出生数は九十九万六千九百七十九人で過去最低の数値であると発表。現在か

ら三十年後になると、出生数は二十九万人減少、高齢者（六十五歳以上）の割合は九・四パーセント増加、高齢者一人を支える働き手の数は〇・六九人減少してしまう。」と書いてあった。私はこの記事を読んで、思った。現在の中高生が成人して働く頃には、高齢者にかかる介護や医療費が今よりも増大し、それが重くのしかかってくる可能性が高くなってしまふ、と。

そもそも少子化のきっかけというのは何なのか、気になって調べてみた。すると、「第三次ベビーブームの到来が期待されていた九十年代頃から少子化のはじまり。その頃は、日本経済が不況だったこともあり、結婚をためらったり、子供を産み育てる余裕がなくなってしまったため少子化が進んでしまった。」と説明されていた。

では、現在の状況はどうだろう。近年は生涯働く女性が増え、独身のままでいる「未婚化」や結婚年齢が上がる「晩婚化」が進み始めている。しかし、今の現状を生かした取り組みが行われているらしい。それは、主に三つある。一つ目は、婚活パーティーの実施。レストランや小料理店が未婚の男女に出会いの場を提供し、交際につなげ、結婚まで発展させてもらうのが狙いだそう。二つ目は、不妊専門相談センターの設置。保健医療施設などで専門医が、なかなか妊娠できない「不妊」に悩む夫婦の相談に乗り、治療の情報提供をしてくれるそう。三つ目は、乳児家庭の全戸訪問の提供。保育士などが赤ちゃんのいる家庭を全戸訪問する。育児の悩みや助言、自治体などの子育て支援情報を教えてくれるそう。

では、高齢化や少子化が進む日本において中学生の私が今出来ることは何だろう。二十年、三十年後に子供を産み育てることを幸せと感じられる未来がやってくることを思い描き、このような作文を通し考え、伝えていくことではないか。また、祖父や祖母の元へ行き、年齢の幅を超えてたくさんのコミュニケーションをとり、いざとなった時に信頼される人材になること。また、今は出来ないが、将来たくさんの命を授かり、私と同じような意思を持つ女性が増えてくれることによって少子化問題がなくなっていく。すると、おのずと高齢者問題もなくなっていくのではないか。そして、その新たな生命が日本を支える大黒柱となり、私達の世代と手をとり合っこの未来を創りだす。三十年後には、このような日本になっていることを願いたい。

奨励賞

諦めないで

多摩市立多摩中学校 三年 河上 桜

皆さんは、「認知症」と聞いて何を想像しますか。私の祖母は、「アルツハイマー型認知症」です。

中学校に入ってから部活と塾に追われていた私は祖父母と一年程会っていませんでした。中学三年の春休み、私は久しぶりに祖父母の家を訪ねました。

「どちら様ですか。」

それが私を見た祖母の第一声でした。私がいかに大きくなったから孫だと分からないんだ、私はそう信じていました。しかし、私が

「私だよ、桜だよ。」

そう言っても私が分からないようでした。

私にはいとこがおらず祖父母の家に暮らしていたこともありかなりのおじいちゃんおばあちゃん子でした。私は、祖父母が大好きだし祖父母もずっと私のことを好きでいてくれると思っていたので私はあまりのショックに頭が真っ白になりました。

祖父と少し話をして玄関を出た時、心に詰まっていた何かをとれて涙が溢れて止まらなくなり、自分でもどうしていいか分からずただただ泣き続けました。

その日、私は両親から祖母はずっと前にアルツハイマーと診断を受け、薬で進行を遅らせてきたことを聞きました。

私は、その日から認知症についてインターネットなどで調べるようになりました。調べれば調べるほどどうしてこんなことになってしまったのか、何故祖母なのだろう、という気持ちが大きくなっていきました。

私の母方の祖父母は、父方の祖父母より年上ですが重い病気にかかることもなく元気に過ごしています。そのことを考えるとなおのこと何故、どうしてという思いが膨らみ、もっと会いに行けば良かった、どうして一年も会いに行かなかったのだろうかという後悔が出てきました。

父には、実の息子として会いに行きたくはあったのですが中々会いに行ってくれませんでした。私の中の認知症や父に対しての疑問は増すばかりで祖母に会いに行かない父に怒りさえも覚えるようになりました。

そういった状況の中で色々と調べていくうちに、私は認知症になった方と家族の苦

しみや認知症に対する差別や偏見について知りました。

親が重い認知症だと分かった時、自分を忘れられたり、昔と変わってしまった姿を目のあたりにすることへの恐怖や信じたくないという思いから親に会いに行けなくなってしまう人が多くいることを知りました。父ももしかするとそうなのかもしれない、きちんと話し合って説得し、一緒に会いに行こうという気持ちに変わりました。

しばらくかかりましたが父は祖母の好きだった音楽のCDを持って祖母に会いに行きました。祖母は、その音楽を聴いて泣きました。

「今までどこに居たの。どこに住んでいるの。」

そう質問し始め、私にも

「今度遊びに行くからね。」

と言ってくれました。

認知症でも、記憶が無くても泣いたり笑ったりできるのです。認知症はぼけではありません。障害でもありません。誰にでも起こりうる症候群であり、認知症になるのは高齢者とはかぎりません。

認知症は以前「痴呆症」と呼ばれ差別や偏見を受けてきました。「痴呆」とは「愚か」という意味です。「痴呆症」の呼び名が廃止された現在でも認知症患者に対する差別や偏見は残っています。

認知症は老化によるぼけや精神病、障害と混同されがちですが、認知症は病気から来る症状であり、そういったものとは全く違います。さらに認知症患者の家族が本人を拒絶したり認知症の回復を諦め、放棄してしまうという事例も後を絶ちません。

高齢化の進む日本でこういった問題はますます深刻化するでしょう。しかし私は、認知症を、祖母のことを、決して諦めません。

祖母の人生の中で私についての記憶はほんの短いものかもしれませんが、けれど祖母が憶えていなくとも私は憶えています。そして私が祖母のことを大好きな気持ちは変わることはありません。

現在、世界で三千五百万人以上の人々が認知症に苦しみ、その家族もまた苦しんでいます。家族が諦めることも、恥じることもなくこの問題と向き合っていけるよう、認知症への差別や偏見の無い世の中になると良いと思います。そして全ての人からしく生きてゆける権利が保障される社会になることを願っています。

奨励賞

私の願い

府中市立府中第二中学校 三年 山口愛未

沢山の人が会話をしている場所で、耳を塞いでみてください。きっと音が何も聞こえないという静けさの中で人々の口だけが動いている状態になると思います。みんなは何を話しているのだろう。みんなの話の輪に入れず、孤独を感じてしまいます。それが耳が聞こえない人の気持ちなのです。

私の兄は、生まれつき難聴という障害を持っています。耳に障害がある、耳が聞こえないという事です。補聴器を付けて生活しているので周囲の人は補聴器を付ければ会話もできるのだろうと感じるようですが、途切れ途切れの音、単語、その場の雰囲気、話し手の口の動きを読んで理解しようと努力しているのです。

聴覚障害、それは外からは分かりづらい障害だと言われます。補聴器を付けていなければ見た目では分かりません。補聴器を付けていれば、眼鏡をかけて視力が良くなるのと同じように、聞こえが良くなると思われがちです。ですが、実際は聴覚障害者の人に話しかけても聞こえなかった時は返事をしません。その為、無視されていると誤解をされたり、何度も聞き返されるのが面倒と思われ不当な差別を受ける事もあります。そして、障害を持っている人は障害自体が悪い事ではないのに遠慮がちになり、平等な社会生活を送る事ができなくなります。もちろんそれは全ての障害を持っている人に当てはまる訳ではありませんが、私はそういう悲しい思いを持って生活している人も少なくはないと思います。

私の兄は補聴器を付けていますが、聞こえない人同士では手話を使って会話をします。手話の分からない健聴者の人と会話をする時はゆっくり大きな声で話してもらい、口の動きを読み取ります。また、筆談という方法を使ってコミュニケーションを取る場合もあります。以前、兄が初対面の人と会話をする際に筆談をお願いしたところ、断られた経験があったそうです。その人にとっては書く作業が面倒臭いだけだったのかもしれないし、障害者と関わりを持つ事が嫌だったのかもしれませんが、兄はこの経験から相手の迷惑を考え、自分から積極的に行動する事を遠慮がちになりました。私はこの話を聞いて理不尽だと思いました。障害が有る、無いに関わらず全ての人が平等に生活し、生きていく権利があるのだから、どちらか一方が我慢をする必要はないと思うのです。

昨年施行された「障害者差別解消法」を知っていますか。障害を理由にした差別を無くし、障害があつて困っている事に配慮や支援を提供して、障害が有る人も無い人も同じように社会参加できるようにしようという法律です。健常者の私達にとっては遠い存在の法律のように感じますが、障害を持つ人にとってはこの法律によって助けられる事が沢山あります。障害を理由に諦める事が少なくなるからです。支援を受ける事によって、平等に社会参加できる機会が増えるのです。耳が聞こえない、目が見えない、身体が不自由、そんなハンディキャップを持っていても一人の人間として幸せに暮らしていく権利はあるのです。障害は不便な事はあったとしても、不幸せな事ではありません。周りのみんながその事に気づく心さえ持ってくれば障害者も暮らしやすくなると思います。

兄は今、自分にとって必要な支援を受けながら学校に通っています。支援をしてきているボランティアの人達は、自然に、そして真剣に寄り添ってくれています。そんな人達に感謝しながら自分とは別の障害を持つ人の為に自分ができることで手助けをしようと頑張っています。そんな兄を私はすごいなあと尊敬します。障害を持っていても人の役に立つ事ができる。社会の役に立つ事ができる。それは健常者も障害者も同じです。

身近に障害者がいる環境で育った私だからこそ思う事。それは、普段の生活の中で聴覚障害者にかかわらず、困っている人を見かける場面があつたらためらわず、笑顔で手助けしようという事です。それによって困っていた人の気持ちに少しでも寄り添う事ができればいいなと思います。

一人一人が相手を思いやり、いたわり、寄り添い、障害の有る無しに関係なく自由に、平等に、お互い支え合いながら生きていける世の中になる事が私の願いです。

奨励賞

恩返し焼豚

府中市立府中第八中学校 一年 内田 柊

「この焼豚おいしいよね。どこで買ったの。」

「買ったものじゃなくて、いただきもの。手作りなのよ。」

「誰の手作り？」

「おばちゃんの教え子で今、お肉屋さんをやっている方の手作り。」

今年、初めて知った。毎年、この時期に焼豚を送ってくれる方が、私の母の叔母の、教え子の方だったということ。

去年九十二歳で亡くなった母の叔母は、教師をしていたが、生涯独り身だった。年をとるにつれて認知症を患った為、埼玉県から東京に引っ越しして来た。身寄りもいないため、弟である私の祖父が面倒をみていた。

東京に来たため、私たちと会うことが多くなったものの、症状が進んでいて私と弟の名前を覚えず、

「おちびちゃん」

と喋りかかっていたり、さらには母のことを

「デブ」

「太ったね。」

と言ったりするのを聞くと、良い印象をもてなかった。

しかし、認知症は進行する一方で

「お金がなくなった。」

と喋りかかっていたり、

「ヘルパーさんに、ものを盗まれた。」

と怒ったりと、典型的な認知症の症状を引き起こしていた。

でも、認知症を患う前の本来の母の叔母は、とても面倒見の良い人柄だったそう。そんな母の叔母の最期は、同じ老人ホームに住む、車いすの人の車いすを押していたという。ヘルパーさんが、

「大変でしょう。かわりますよ。」

と声をかけた時にいきなり、ヘルパーさんにもたれかかるように倒れ、そのまま亡くなったそう。最期までその人を思い、安心したような安らかな顔で…。

私は、素晴らしいと思った。認知症でありながらも、最期まで人を思いやることは忘れなかった母の叔母を。とても誇りに思った。

やっと分かった。母の叔母が亡くなった今でも教師としてだけでなく、人として慕われている理由が。そして、さらに知りたくなった。今までは、嫌な印象ばかり持っていたはずの母の叔母がどんな人だったのかが、とても気になった。

昔、母の叔母が教師をしていたころの日本は、戦後まもなく、今のように豊かではない時代だったため、小学校の生徒も、貧しい生徒が少なくなく、栄養のある食べ物を中々食べられない生徒もいたそう。そんな中、当時、とても高価な食べ物であったバナナを生徒に食べさせ、栄養を与えるなどをしていた母の叔母は、多くの生徒に慕われていたと思う。私は、このことを知り、母の叔母の本当の人柄が分かった気がした。

私は、認知症で印象の良くない母の叔母しか覚えていない。しかし、本当は困っている人を思いやれる優しい人だった。もし、本当の母の叔母を知らずに過ごしていたら、きっと一生私の心の中での母の叔母は、少し意地悪で印象の良くない人、で終わっていたと思う。いや、もしかしたら忘れてしまっていたかもしれない。

私は、今回初めて

「人が人に恩を返す」

ということを実際に感じた。そして、自分が人を思いやることができれば、その人と一生良い信頼関係を築き上げられる、ということも実感した。

「人という字は人と人とが支え合っていてできる。」

この言葉の意味も、深く知ることができた。

普通の夜ごはんの何げない会話から私の心は、大きく広がった。私は、人を思いやることのできた母の叔母を誇りに思う。そして、今もその恩を忘れず、恩を返す教え子の方から、人の本当の「生きる」ということを学んだ。私も、多くの人に支えられて、生きている。だから私も、誰かを支えていける人になりたい。

「人は支え合いながら生きる。」

私は、この大切なことを焼豚を通して母の叔母と教え子の方に教わり、自分を少し変えることができた。その機会をくれた焼豚にも感謝の気持ちを伝えたい。

「ありがとう。」

と。

奨励賞

乗り越えた先にあるもの

国分寺市立第二中学校 三年 石田 袈也加

いじめ。この言葉を真剣に考えた事がありますか。私は、小学校に入学するまでドラえもんを観ていました。のび太が、ジャイアンやスネ夫にいじめられている場面を観て、

「私なら、ちゃんと言い返せる。」

と強気でいました。いじめなんて怖くない。そう思っていました。自分が体験するまでは、

小学一年生、初めての係ポスターを書く時

「袈也加ちゃんは、病気だから、書かないで。」

そう言われました。私は小さい頃ある病気にかかっている、他の子より走れない、歌えない、同じようにしたら倒れてしまう子でした。その事を、事前にクラスで説明してもらっていたのです。ただただ悲しかった。何が起こったのか分からなかった。しかし、その翌日先生に注意してもらい謝ってもらったので、この時はまだ、思っていました。大丈夫と。

しかし、その後も色々な事をされました。無視される、菌扱いされる、仲間外れにされる、その場にはいないように扱われることは日常茶飯事でした。(死んだら、楽になれるのかな。) そう思い、親がいない時首に縄をかけましたが、その後どうすればいいか分からず一人でその場に立ちつくしていました。しばらくして考え込みました。

(何かしたっけ) 何一つ浮かびませんでした。どうしたら仲良くなれるのか。それを考え続けていました。

そんなある日、思いがけない事が起こりました。

「ずるいですよ先生。全然石田さん走れるのにさ、最良ですよ最良。」

私は、そんな声を聞いて思わず隠れてしまいました。私は最初の方で書いた通り、人より長く走れません。酸素不足になり脱力や、話せなくなる事もあるので、他の子より走る距離は短くしてもらってました。それをリレーの時も行っていたため負けた子達が責めだしたのです。何より辛かったのはその子達皆、体調を気にかけてくれた子達でした。裏切られた。そう強く感じその場を去りました。誰も知らないと思います。私が聞いていたとは。その翌日、先生に、

「皆と同じ距離、走ってみようか。」

そう言われました。私は無言で走りました。天と地が分からなくなりました。体に力が入らなくなりました。あえて普通のふりをしました。倒れて、距離を短くしたらまた、やっかみを受けるだけ。先生はあの時、何も言い返してくれなかった。私の事を説明してくれなかった事も辛かったです。

相変わらず孤立していた毎日、転校生がやって来ました。その子と仲良くしている内に少しずつ、信じられなくなった人達を信じてみようと思えるようになりました。いじめてくる子達と、向きあいたいと思えるようになりました。そして、先生と、その子達で話し合いました。その後、その子達は攻撃してこなくなりました。

この経験から学んだことは、二つあります。

一つ目は、言葉は簡単に人を傷付ける事ができるという事です。皆、言った言葉はすぐに忘れ、言われた方だけが覚えているという事が多いです。なので、私は言う前にきちんと考えてから話すようにしています。

二つ目は、辛い出来事も意味あるものにしなければならぬという事です。自分はいじめられたと自信をなくしてはいけません。そこで何を得たのかが大事だと思います。私はいじめられている時は本当に、なぜ、こんなひどい事されないといけないのだろうと思っていました。しかし、いじめられたから人の苦しみも早めに気付いて声を掛ける事が出来ます。言葉の重みを理解できます。優しい人になれました。同じ思いをする人がいないように正義感を持ってました。

なので、今いじめにあっている人は自信をなくさないで下さい。今は辛くて消えたいと思うかもしれませんが。でも耐えて下さい。耐え抜いた時、あなたは誰かを助ける事が出来ます。何をされたかを心に刻むのではなく、何を得たかをよく焼きつけておいて下さい。自分を信じて下さい。また、いじめを行っている方にいいです。目を背けないで下さい。あなた達の中には家庭の事情で辛い思いをしている方や、いじめられたから復讐を行っている子もいると思います。でも満たされはしません。行った事は自分に返ってきます。自らの首を絞めないで下さい。助けを求めてください。手を差しのべてくれる人はいます。信じて下さい。誰かを暗闇に引きずりこまないで下さい。傍観している人にもいいです。あなた達が勇気を出して先生に伝えたり、止める事によって命を救う事が出来ます。あなた達がいじめを止める事が出来るか否かの鍵です。仕返しされるのが怖いならいじめをさせない空気作りをして下さい。見ているだけの子もいじめに加担しているのと同じです。

いじめている側もされる側も苦しみから救われ、いじめがなくなる事を願っています。

奨励賞

過去～未来を変える日本の勇者～

国分寺市立第四中学校 二年 本庄愛歩

まるではるか昔の出来事で、だいぶ前のことのように感じる。

二年前。小学校生活、最後の年。その日もいつもと変わらない平凡な一日で、お腹もすいてうとうとしかけている四時間目だった。机からはみだしそうなくらいの歴史の教科書を何も考えずただ見つめていた私の目にとまったのはただひとつの言葉だった。「ヒロシマ」ただ一言の言葉を見ただけだったが、私の瞳は数分前とは違う輝きを発していた。広島は私が生まれた場所であり、母の故郷だ。豊かな街並みと温かい心をもった人達。澄んだ空気。私は広島の何もかもが大好きでした。でも、その瞳の輝きはそう長くは続かなかった。教科書に描かれた広島は、私の知っている広島ではなかったから……。

第二次世界大戦末期一九四五年八月六日午前八時十五分。聞いたこともないような爆発音とすごい輝きを発した原爆を見た時、その場所にいた人達は何を考え、何を感じていたのだろうか。死を覚悟したのだろうか。その一瞬に起こった出来事。今を生きる私達には何も分からない。考えれば考える程知りたくなる。遠い昔の事のように感じる。でも、今の私だからこそできる事はないのだろうか。「考えられる事はたくさんあるはずだ」と私は思う。例えばアメリカ軍の気持ち。たくさんの人が戦争のために命を懸けて戦った。私にはそんなことはできないし、命を懸けて何かをしたことも、死を覚悟したこともない。誰も好きで人の命を奪ったり、危険にさらしたいわけじゃない。「仕方がないこと。」そのたった一言で片づけられることじゃない。私でもその事は分かっている。原爆を落としたその瞬間、アメリカ軍の人々は何を感じたのだろうか。たくさんの人が苦しむその姿をどんな思いで眺めていたのだろうか。それはその人達にしか分からない。この出来事のせいで苦しんだ人達がたくさんいる。家族を失った悲しみ、原爆によって生まれた放射線による影響のせいで今も苦しんでいる人。過去は変えられない。どんなに願っても過去に戻ることはできない。それは仕方がない事だ。

「原爆。」それは恐ろしい物で通常の兵器とは比べものにならないほどの威力と放射線による後遺症をひきおこすという。寿命調査により、被爆者は非被爆者より白血

病やがんになる確率が高いという結果が出ている。原爆は、その時だけにとどまらず、今もなおたくさんの人々を苦しめている。

白黒の写真。教科書にのっている写真は古く、本当に日本で起きたことなのかと目を疑う内容ばかりだった。死者の数は広島だけで約十四万人、長崎も入れれば約二十一人にもおよぶ壮大な数で、その頃の私には受け入れにくい内容ばかりだった。

戦争は何のためにあるのだろうか。私はその時初めて「戦争」という言葉に興味をもった社会の授業で今までならってきたことは自分達にはまったく関係のないことだと思っていた。でもそれは本当に正しいことなのだろうか。今の世の中で聞く「戦争」は昔の「戦争」とは違うという勝手なイメージをもってはいないだろうか。戦争は良い事ではなく、何の解決にはならない。それは「あたりまえ」のことだ。きっと誰しもそう思うだろう。戦争は悲しみを生む。戦争をしていいことなどない。例え国に利益があったとしても、それを手に入れるために犠牲になった命があればそれはよかつたとはいえない。

今は毎日があたりまえにやってきて、明日自分が生きていないかとも思うことはないといえるだろう。戦争とは無縁の毎日を送っている。でも、今この瞬間も戦争によって苦しめられ、命の危険にさらされている人がいる。皆は命の重みをどれほど理解しているだろうか。教科書にのっている勉強をしているといつの間にかただの昔のことだと思ってしまう。関係のない事のように感じてしまう。でもそれは正しい事ではない。過去に起こってしまったことを未来に生かすことはできると思う。過去の過ちをもう二度とくり返さないために私達ができる事。それは過去に起こった事を深く知り、これからの日本の平和を守るために一人一人が考え、行動すること。過去を過去だけで終わらせないために戦争や原爆のむなしさを今の時代の人にもちゃんと伝えて他人事にしない事。今の日本は平和だ。あっという間に一日が終わっていく。それがあたりまえ。でも、いつかあたりまえじゃなくなってしまうかもしれない。あたりまえは戦争や原爆を体験したり、そのむなしさを知っている人達が作りあげてくれたものだ。今度は私達の番だ。過去の出来事。これからの未来の出来事。この世が平和でいつまでも大切な人の笑顔を見られるように、私達は過去と向き合い、これからの平和な日本を作っていこう。

奨励賞

普通の社会への第一歩。

明治大学付属明治中学校 三年 古川裕菜

昨夏、私が住む相模原市にある障害者施設で大変ショックで痛ましい事件が起こりました。以前その施設に勤めていた人物が、意思疎通のできない障害者を襲い、沢山の方を死亡、負傷させました。私は、市内で起きたその事件そのものも大変ショックでしたが、よりショックだったのは、亡くなった方たちが匿名で報道されたという事実でした。それは、遺族の方々の希望だったそうですが、なぜ罪もなく被害にあった方々が名前を隠さなければならないのか、

「障害者だから？」

「障害者施設にいたから？」

私は納得できない思いで考えました。と同時に以前母から聞いた話を思い出しました。

妹が生まれた時のことです。直後の検査で

「片耳が聞こえていない可能性があります。一週間後に詳しい検査をしましょう。」

と言われたそうで、両親は再検査までの一週間とても悩み苦しんだそうです。片耳が聞こえないことでの妹の成長への不安はもちろんですが、もし妹が障害者となった場合、姉である私のこともとても心配したそうです。妹が障害者ということで姉である私にも「障害者の姉」という世間からのハンデキャップを背負わしてしまうのではないかと。なので、再検査の結果、『異常なし』と診断された時には、妹のことはもちろんですが、私のためにもよかったと安心して感謝して泣いてしまったそうです。私はその話を聞いたときには、

「お母さんたちの考えすぎだよ…」

と軽く考えていたのですが、今回の事件の被害者匿名という事実をみて、大人が思う辛い現実を痛感しました。

昨年的事件で犯人は

「意思疎通のできない高度障害者は生きている意味がない。」

という動機で犯行を行ったそうですが、それは犯人の身勝手な考えで間違っていると思います。憲法でも「命を脅かされることなく、自由に、そして個人の考えによる幸福を求める権利は、どんな人にも平等にあり、それを阻むことは人権侵害にあたる」と人権は守られています。「生きる意味」とはその人本人が決めることであり、人に

よって千差万別だと思います。障害者の方は「生きる意味」を考えられないと思われがちですが、だからといって、その人の生活や命や幸せを奪う権利は誰にもないと思いますし、その方の存在そのものが家族の「生きる意味」になっているのかもしれない。

先日、母が外食している時に、近くの席に大きな声を何度も上げる方がいらっしまったそうです。ご両親らしき方は大声を必死に止めようとされ、周りにすごく恐縮されていたそうです。母にその時どうしたのかを聞いてみたら、

「普通にごはんを食べてきたよ。普通にしているのがいいと思ったから。もし隣の席とかだったら、『大丈夫ですか？』とか声をかけたかもしれないけど。だって、障害をもつ人が家族にいたって、外食しなければならない時もあるし、外食したい時もあるよ。私たちは普段、積極的に障害者の方の応援やお手伝いはできていないけど、まずは障害者の方を連れた家族が遠慮しないでいい社会にはしたいね。これは難しいことでなく、一人一人の優しさがあればすぐにできることだよね。」

確かに障害者のいる家族は私達では想像できないような大変なことが多いのも事実だと思います。行政の力がもっともっと必要なこともあると思います。選挙のたびに「障害者福祉」を訴える候補者もいます。政治や行政で、障害者の方や家族の方が安心して生活できる施設や見守る体制の充実、経済的な援助を整えていただき、私達一人一人が障害者の方と普通に接することができるようになることが、まず必要な第一歩ではないでしょうか。大人や私達の世代が普通に行えれば、小学生や小さい子供たちにも「当然のこと」として受け継がれます。人気のあるドラマや身近な芸能人のブログなどに障害者の方との自然な接し方などが映されたり書かれたりすると、私達世代には道德の授業で教わるよりも実感しやすくわかりやすいと思います。

様々な価値観が尊重され、人とのつながりが弱くなっている現代ですが、障害者の方や家族の方が匿名で生活しなければならない世の中は間違っていると思います。一人一人がみな普通に接することができる世の中、それが「人権を尊重できる世の中＝普通の社会」への第一歩だと思います。私たちに大きな勇気や行動力がなくても、気持ちの持ち方ひとつで、皆が平等に個々の幸せを守れる社会、人権が尊重される社会になるのではないのでしょうか。罪のない被害者が匿名で報道されるという悲しい事実がもう二度と起こりませんように。

奨励賞

青い空に平和への祈りを込めて

東村山市立東村山第一中学校 二年 清水花音

第二次世界大戦末期の一九四五年八月九日、長崎へ原爆が投下された。その日から七十二年目にあたる今春、私は家族旅行で初めて長崎を訪れた。

母の勧めにより立ち寄った原爆資料館。今思えば、あの頃の私は原爆について知識があまりにも無かったように思う。展示室のある地下に向かって通路を下ってゆく。ひんやりと張り詰めた空気が漂う。胸がザワザワし始め、行きたくない気持ちが膨らんでいった。この先に何か恐ろしいものが待ち受けている気がして。ガクガクと足が震えた。

そこには、想像を絶する地獄のような光景が広がっていた。生々しい展示物の数々に思わず目を覆った。幼子を抱いて息絶える母親。自分を犠牲にし、子を守ろうとしたのだろう。焼け野原に呆然と立ち尽くす子供。まだ状況を理解出来ていないのだろう。焼け焦げた弁当箱。ひしゃげた鉄骨。昼食を楽しみに待っていた子供の気持ちは、頑丈な鉄骨が変形する程の破壊力で一瞬に粉々にされたのだ。

同じ日本人として、現実から目を背けてはいけな心では理解していた。しかし、徐々に血の気が引いていくのを感じた。気分が悪くなってベンチに座り込む自分が情けなかった。現実をはっきり理解していない小さな弟は、私とは対照的に無邪気だった。もどかしさも沸き上がり、私は葛藤していた。

その後、平和公園へと足を運んだ。南端は爆心地で、「原爆落下中心地碑」が立っていた。今では、焼け野原の面影など全く無い、きれいに整備された公園。まさに、この場所に原爆が投下されたとは到底想像がつかない。北端には「平和祈念像」がある。青銅製で巨大であった。神の愛と仏の慈悲を象徴し、天を指す右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を表している。この像には、数えきれない程多くの人々の悲しみや怒り、痛みや絶望、そして平和や明るい未来を願う人々の思いが込められているのだ。そんな像を見て、私は手を合わせずにはいられなかった。

ふと見ると、像の前でピースサインをしながら写真撮影をする若者達があった。私は違和感を覚えるとともに、この神聖な場所を訪れる意味を、改めて考えさせられた。

長崎から帰宅して、祖母から軍医だった曾祖父の話聞いた。潜水艦に乗っていたままたま停泊していた時、原爆が落とされたという。九州中の医者が緊急招集される

中、曾祖父も負傷者の手当てにあたったそうだ。

曾祖父は、当時の事をあまり家族に話したがいなかったらしい。曾祖父にとって、思い出すのも辛く痛ましい過去だったのだろう。曾祖父は私が生まれる前に亡くなったので会ったことはないのだが、私はそんな勇ましく強い曾祖父を誇らしく思っている。

日本は、世界で唯一の被爆国である。今を歩む私達が、平和実現のために出来る事は何だろうか。それは、この悲劇を風化させず、世界中の人々へ発信していく事だと私は思っている。

昨年、第四十四代アメリカ合衆国大統領のバラク・オバマが広島を訪問し、「核兵器のない世界」についてスピーチした。そして、被爆者の代表者と抱擁を交わした。現職大統領が広島を訪れ、被爆者に寄り添ったのはこれが初めてだった。その為、この訪問は歴史的な出来事として大々的に報道された。これ以降、外国人の広島訪問が増え、今年の平和式典では、外国人向けの席がすぐに予約で満席になったそうだ。

インタビューで、ある外国人は「オバマが広島を訪問して、どのような場所なのかを自分の目で見たくなった。」と答えていた。被爆者の多くは高齢者であり、自分達で被爆の実情や様々な想いを伝えるには限界がある。このように、外国人の訪問が増えたのは良い事だと思う。彼らが帰国して家族や友人に語れば、訪問者は更に増えるだろう。世界中の人々が原爆の恐ろしさを知り、平和への想いをより強くしていったほしいと思う。それが、最終的に核兵器の無い世界へと繋がるのだから。

長崎を訪問しなければ、平和について立ち止まって考えることはしなかつたろう。日常は、当たり前のように過ぎてゆく。長崎はとても穏やかな所だった。七十二年前、この地に生きていた人々にも、当たり前の日常があつたはずだ。その事を考えると、胸が痛む。

残念だが、現在も核保有国が世界中には複数存在する。最近では北朝鮮のミサイル発射等不穏なニュースもよく耳にする。しかし、世界中の人々が原爆の恐ろしさを理解し発信していけば、いずれは核兵器の無い世界の実現も夢ではないだろう。

この澄んだ青空が、今後二度と黒煙に埋め尽くされることのないように。私は心から強く願っている。

奨励賞

温かい福祉の発展へ

東村山市立東村山第四中学校 二年 櫛野花凜

「どうして手が震えているの？」

私が初めてそう聞かれたのは、小学校に入学して間もない頃だった。給食中、スープを口に運ぶ際手が震えてしまい、上手くスープを飲めずにこぼしてしまったからだ。周りの友達から見たら震えることが不思議だったのだろう。私の日常生活の中では大した問題ではなかったから気にはしていなかったが、震えない方法を自分なりに探したり、震えてしまいそうな動作は皆の前で行わないようにしたりした。それでも、私への疑問は増えていき「手が震える子」が「花凜」となっていくことが辛かった。

中学に入学し、新しい友達との輪が広がるとまた「どうして？」と聞かれることが増え、時には影で噂をしている所を耳にしたこともあった。私は、間接的な情報で誤解や思い込みをしてほしくないという思いから、クラスの皆に自分の身体について伝えることを決めた。

私は、生まれてくる直前に母のお腹の中で心臓が止まり、生まれてくることさえ難しい状況だったこと。脳の血管に酸素が送られず低酸素で生まれたことにより手の震えが出ること。自分の意志とは関係なく震えてしまうこと。私自身が生まれたときからこの身体だから、あまり不自由を感じていないこと。感情は皆と変わらないこと。

伝えたい内容を理解してもらえたかはわからない。でも、私の個性として認め、受け入れてもらえたことは間違いない。

障がいも個性の一つだ。様々な原因で起こる障がいについてどのような福祉を行うかが課題だ。かつての障がい者福祉は、特別な支援や教育は専門の施設で行うほうが効果的・効率的だと考えられ、社会から切り離された状態だった。しかし、障がい者福祉の在り方が見直され一九七〇年どんな場合であっても、障がいがあることを理由に差別したり、障がい者の権利をそこなうようなことをしたりしてはならないという障がい者基本法が制定された。後一九八〇年、ノーマライゼーションの考え方が世界中で広まり、障がいがあっても障がいのない人とかわらないノーマルな環境の中で生活できるようにしようという考えだ。現在の福祉の基本となっている。原則として、知的障がいがあっても本人の願望や決めたことが尊重される。障がい者も子どもからおとなへと変化するライフサイクルを体験できる。などが挙げられる。

私の住んでいる東村山市には、一般就労することが困難な障がいを持った方々が焼き菓子を作り、販売しているお店がある。焼き菓子の陳列棚からは中の様子が見える。丁寧に作業を行い、仕事に誇りを持って働く生き生きとした姿が印象的だ。これこそが、ノーマライゼーションの考えに基づいた社会なのだろう。障がいのあるなしに関わらず、お互いが同じ環境の中で生活を送る。このことは、社会に限らず教育を受ける中で学ぶとても大切なことだと思う。私自身の経験から感じたことでもある。

障がい児だけが特別な施設で教育を受けるのではなく、通常の学校で一緒に教育を受けることができる特別支援学級が設けられた小学校も数多くある。私の卒業した小学校にもあり、学校行事や給食の時間などに各クラスで交流の時間を持つ。共に同じ時間を過ごすだけではなく、特別支援学級の先生による低学年向けの啓発授業が行われる。

みんなの頭の中には、勉強・遊び・コミュニケーションの三つのひき出しがあって、この三つのひき出しを皆はうまく使いこなしているけれど、特別支援学級の子の中には生まれつきひき出しの数が少ない子や、ひき出しを開けることが難しい子もいる。交流していく中でその子のひき出しの数を探してみてね。そして、ひき出しをうまく使えないときは手を貸してくれたらうれしい。という内容だった。自分の中で素直に受け入れることができ、心に強く感じて忘れられない授業となった。

今以上にノーマライゼーションの考えを広め定着させる為には、障がいのある方との間に壁を作り出す前に、関わりや啓発活動を通じてお互いを知り、受け入れ合うことから始めるべきだと思う。そして、障がいのある方も気軽に参加できる地域づくりや、共に作業ができるボランティア活動などを行える社会が理想的だ。それらの活動が行える環境を整えることから取り組んでいきたい。

私の友人は、私の手が震えて失敗をしても笑って見守ってくれる。一人一人の理解と行動が温かい福祉の発展へとつながっていくのだと思う。

理想にとどめることなく、社会へ発信する努力を続けたい。

奨励賞

生きるということ

東村山市立第五中学校 二年 秋本未来

病院の長い長いろうかをずっと奥へ行った先に少しうすぐらい病棟がある。そこが、緩和ケア病棟。いわゆるホスピスだ。初めて、ホスピスを外から見た時、暗くてさみしいといった所で、気持ちが重くなった。

祖父の病名は末期ガン。脳の転移もあり、残された時間はあとわずかだと知ったのは桜のきれいに咲くころだった。初めてガンという事について考えた。日本人の死亡原因の一位は男女ともガンといわれているが、自分の身近な人がガンになるとは思ってもいなかった。病気がわかってからは、手術をするのか、薬を使うのかなど、たくさんのお話し合いがされていた。しかし、治療をするという事は、病院のベッドの上での生活になってしまうという、祖父は、治療をあきらめるのではなく、治療はしないという選択をし、自分らしく最後まで普通の生活をしていきたいという希望で、ホスピスの入所を決めた。

ホスピスとは、積極的な治療は行わず、痛みなどの苦痛を取り除きながら、人間が人間らしく自由に生活しながら家族と共に最後を迎える施設である。二十四時間面会自由、部屋は個室でシャワーやトイレもついている。祖父の部屋に飾ってあったものなどをもってきて、今までの生活とあまり変わらない様にした。食事や外出も自由なので、祖母や母が作った料理をみんなで食べたり、父や兄と売店へ買い物に行ったり出来た。外から見た印象とはまったく違って、中はとても明るくきれいだった。月に一回、ピアノの演奏をしてくれたり、レクレーションなどもあり、にぎやかだった。祖父を担当してくれた先生や看護師さん達は、とてもやさしく親切にしてくれた。祖父のケアだけでなく、私達の心のケアなどもしてくれて、不安だらけだった私の気持ちも、少しやわらいでいった。

祖父は自然が好きで、よくハイキングや山登りに出かけていたので、この病室から見える木々や花、鳥の声は元気をあたえてくれる。休日には季節の花や昆虫などをさがしに車いすで散歩する時間は、私にとっても楽しく大切な時間だった。少し体力が弱ってきた祖父は、私の日々の話を聞き、大きくうなずいた後「女の子は笑顔が一番」と笑って言ってくれた。私が小さい頃からの口ぐせだ。そして私の将来の夢や、やりたい事について話し、私らしく毎日元気に生活するためには、人への感謝の気持ちが

一番大切だという事を話してくれた。どんな時でも今を支えてくれる人がいるからこそ自分がある。今ある環境があたり前だと思わず、ありがたい事だと思う様にしなさいと言った。そんなまじめな話をしたのは最初で最後の出来事だった。その日は庭にきれいにあじさいが咲いていたので部屋に一本持ち帰り、かざらせてもらった。その後少し暑くなってセミの声が聞こえてきたころ祖父は天へと旅立っていった。

生きるという事、自分の命について、大切な人の命について本当に考える事が出来たと思う。祖父が亡くなって、さみしく思う日が多いが私にとって大切な事を考える機会をあたえてくれた事に感謝します。

日本国憲法の三原則にもある「基本的人権の尊重」人間が人間らしく生活するために生まれた時から持っている権利とあるが、私は自分が自分らしく楽しく元気で生活できる権利こそが基本的人権の尊重と理解していきたいと思う。自分が自分らしく生きるという事を、自ら考え行動する。祖父は最後の最後まで生きるという事を楽しんでいて。毎日散歩をしたり、好きな物を食べたり、テレビを見たりと生き生きとしていた。もし、手術をしたらもう少し長く生きられたかもしれないと思う事もあったが、祖父の生き方を見てきて、祖父にとっても、まわりの家族にとっても、この選択が一番よかったのだと思えるようになってきた。人それぞれ、どう生きていきたいのかという考えや、理想は違う。しかし、それぞれの生き方や考え方を尊重できるような大人になっていきたいと思う。そして、私自身も生きるという事、自分の目標や夢をしっかり考え、それに向けて日々、まわりの人達への感謝を忘れず、自分らしく生きる努力をしていこうと思う。

奨励賞

一緒に遊ぼう！

羽村市立羽村第二中学校 二年 横田 葵

「あおい！行こ！早く一緒に遊ぼう！」
普段よく聞く言葉。でも、この言葉が私の考えを変えた。

私が通っていた小学校の隣には、特別支援学校があった。そこには知的障害のある小学一年生から高校三年生までが通っている。私たちは小学校一年生から支援学校の同じ年の友達との交流会をしてきた。

一、二年生の頃、私は「障害」についてよく分かっていなかったのだと思う。ただ「他の学校の子と交流会をして友達が増えた！」そういう感覚だった。

三、四年生になってやっと、「支援学校の友達には障害があって私たちとは違うんだ。」と考えるようになった。交流会の度に、「上手く話せない子や、身の回りのことが自分でできない子はかわいそう。」と思った。だから、「これできる？」と声をかけてあげたり、手をつないで一緒に歩いてあげたりした。

私たちは六年生になった。その年には三回の交流会があった。二回目の交流会では、支援学校の校庭で一緒に遊んだ。私が立っていると、一人の女の子がこちらに近づいてきた。その子は私が首にかけていた名札を見て、

「あおい！行こ！早く一緒に遊ぼう！」
と言った。胸がドキッとした。嬉しかった。一年生から交流をしてきた中で、名前を呼ばれたのは初めてだった。今まで私は「一緒に遊ぼう！」と声をかけたことはあったけど、「〇〇ちゃん、一緒に遊ぼう！」と声をかけたことはなかった。だから少し驚きもあった。

今まで私は、「支援学校の子は私たちと同じようにできないことも多いから、私がしてあげられることはやってあげなくちゃ！」という気持ちで接してきた。つまり、「私の方がお姉ちゃん」みたいな考えだった。でも、それが小さな「差別」だったのかもしれない。今まで私が「してあげたこと」はたくさんあったが、「してもらったこと」は初めてだった。

その日の交流会では、その子とずっと一緒に遊んだ。三回目の交流会では、その子と手をつないで動物園を回った。お互いに名前を呼び合いながら楽しく過ごした。

私は中学生になった。その子が支援学校の中等部に上がったのか、それとも他の学

校に行ったのかは分からない。でも、その子の何気ない言葉は、私に「障害の壁」をこえさせてくれた。

小学五年生までの私は、「障害者は障害を持っているんだから健常者の私が助けてあげなくてはいけない。」という考えだった。でもそれは、障害を持っている人を自分より下に見た考えだったとその子が気付かせてくれた。

また、「かわいそう」という考えは、自分を基準としていたから出てきたものだと思う。「自分とは違うからかわいそう。」そう考えていた小学生の頃の私は恥ずかしい。自分と同じ人なんて一人もいなく、みんな個性があるのは当たり前だ。障害もそれと同じなのではないのかと思う。

よく思い出すと、支援学校の高等部の生徒たちが私たちの通っていた小学校の階段を掃除してくれていることがあった。横を通る度に小学生が、

「こんにちは！」
と声をかけると、必ず支援学校の高校生も

「こんにちは！」
と返してくれていた。そうやって、障害があってもなくても関係なく、助け合いながら生きられる社会になったらいいと思う。

私は、障害があって困っている人がいたら自分から声をかけて助けようと思う。でも、障害があっても自分でできることも多いと思うので、先回りして何もかも助けることはその人の生きる権利を奪うかもしれない。自己満足ではなく、相手のことを思いやって「人助け」ができる人になりたい。

私は小学生の時に障害を持った人と友達になれてよかったと思う。学校で障害について学ぶことはあるけれど、実際に一緒に話したり遊んだりしたからこそ分かったことも多い。貴重な経験だったので、これを活かして障害がある方とも普通に接していけるようにしたい。

奨励賞

一緒に生活していたから学べた事

あきる野市立五日市中学校 一年 立石 糸

私には、知的障害を持つ弟がいます。弟は地域の小学校の特別支援学級に通っています。弟が地域の小学校へ行くまでに、父や母は、何度も教育委員会や学校の先生と話し合い、私の小学校の入学の時とは違って、とても苦労していました。何で弟は、私の様に、普通に学校を選ぶことが出来ないのだろう、と思いました。

私は、弟が生まれてからずっと一緒に生活して来たので、弟が知的障害を持っているなんて少しも気にしたことはありませんでした。私が小学校四年生の時に、弟が入学すると、同時に兄は、小学校を卒業し、中学校へ入学しました。そこで、私は、自分が弟を助けなければという気持ちで、はりきっていました。それなのに弟が入学してから自分の中で何かが変わってしまいました。それまでは、障害があるなんて気にしたことがなかったのに、気にしている自分がいました。弟のことを皆に知られるのが恥ずかしくなってしまうのです。弟は、何事も皆よりペースが遅く、勉強も遅れていたり、学校の決まりが分からず勝手なことをしてしまうこともありました。また、行事の時に、父や母がつきそいをしているときなど、弟が変な目で見られることが気になり始めました。私は、その気持ちを母に打ち明けました。母は、「ゆっくりだけれど、出来ることも増えているよ。学校の中で教室や教材を工夫すれば理解しやすくなると思うし、少しずつ付き添いの回数も減ってきているんだよ。」と教えてくれました。もともと保育園で一緒に育ったお友達も、弟のことを自然と助けてくれていたし、周りの新しいお友達も、少しずつ弟の事を理解してくれるようになっていきました。そして、私もいつの間にか弟に障害があることを気にしていなかった頃の自分に戻っていました。けれど以前と少し違うのが、弟が障害を持っているということを理解して、ありのままの弟を大好きになったということです。

この夏、障害者の入所施設へボランティアに行きました。私は、三日間のボランティアの経験の中で、重度の障害を持っていて、言葉を発する事が出来ない方でも、ちょっとした仕草や目の動きなどで、十分お話が楽しめるという事が分かったり、助けがあれば、私と変わらない生活が出来ることが分かりました。ただ、私と同じように、自由な生活をするには、人手が必要だったり、バリアがあると、行きたい所に行けない制限が出来てしまうということも分かりました。二〇〇六年一二月一三日に国連総

会で、障害者権利条約が採択されました。日本は、その条約を受け入れるまでに時間がかかりましたが、二〇一四年一月二十日ようやく批准しました。日本は、この条約を受け入れたのに、弟が普通に学校を選べなかったり、障害を持つ人たちが、バリアや助ける人の少なさで、外出が制限されるということは、条約が守られていない気がします。そのことを私は、日本人として残念に思います。

弟の存在や、ボランティアの経験を通して気づけたことがたくさんありました。障害のある人が一緒に居る生活が、あたりまえならば、障害という言葉なんて気にならなくなって普通に接していけると思います。障害の有無にかかわらず、ともに生きる社会の実現につながるために、今、自分に出来る、「その人に接して、その人を知る」ということを大切にして行きたいです。